

安田女子大学
現代ビジネス学会誌
2016 年度
Vol.5

安田女子大学
現代ビジネス学会

2016 年度 現代ビジネス学会誌 目次

論文

- 猫車の真正の語源について 水谷 昌義 1
- アリと私たちをつなぐもの —— ミクロ経済学並びに
K. コシークの視点から見た経済のエッセンスについて —— 古山 友則 12

研究ノート

- 社会人基礎力とは何か
～社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」を今、振り返る～ 金沢 英樹 27

- 2016 年 3 月卒業生 卒論題目一覧 38
- 2017 年 3 月卒業生 卒論題目一覧 43

【論文】

猫車の真正の語源について

水谷 昌義

1. まえがき

工事現場で土砂等を運搬する一輪の手押し車のことを現場では猫車と呼んでいる。「猫車」という、工事現場に似つかわしくない愛らしい名称であったため、この呼び名は世の中に知れ渡った言葉となり、辞書にも採録されるほどになった。



Fig.1 工事用一輪車

現場で実際に使用している人にとっては、道具につけられた名称の第一の目的はそれらを区別するための記号である。それに加えて、世間一般では使わない名称や、その現場限りの名称を符牒として使用することにより、プロ意識を高めたり仲間の結束を図ったりするという目的も派生する。

用語を使用している人たちは、識別する目的があるから、意味は正しく知っている。しかし、その語源についてはよっぽど特別に興味を寄せた人でない限りは知らないはずである。地名の由来を住人に尋ねたり、道具の名称の語源を使用者に訊いたりすることは、尋ねられた人の思い込みや、何かを答えなければ気の毒だという良心に基づくその場の思い付きでのいい加減な答えが示されてしまうことが懸念される。これは、答えが得られず不明のままであるよりも悪い結果であり、安易なつくりのテレビ番組などでよく見かける疑問解消の方法である。

猫車についても、様々な語源がもっともらしく語られている(小松ほか 2011[3]、ルックバイス 2003[12]など)。しかし、それを記述している本人にとっても、十分に信用できるものではないらしく、「～などの説がある」や「～の説が有力であろう」などで結ばれている場合が多い。

本稿では、信頼できる根拠から、猫車の語源の確定を提案する。そして、安易な語源の

氾濫に終止符を打つことを目的とする。

2. 猫車の定義

現在、猫車といえば、fig.1 のような工事用の手押し一輪車を指す。現在のこの猫車を定義しておく：

定義 1. 工事現場で土砂などの運搬に用いる手押し車。箱の前部に車輪が一つついており、後部の二股になった柄を手で押して運ぶ。[3][12]

箱もしくは器に柄、車輪、それに置くときに車輪と共に 3 点支持をするための 2 つの爪を備える運搬器具である。しかし、金属車体にゴムタイヤなのは現在の姿であり、本来は木などの材料で作られていたはずである。ここではまず、語源を論議する前提として、いかなるものが猫車と称されてきたのかを、文献を追跡しながら確証していくこととする。

2.1 『建築工事と安全』1929 文献[4]の猫車

猫車に関する筆者の知る最も古い記述は、昭和のはじめの高木 1929[4]への掲載である。写真も多用されている書籍であるが、残念ながら猫車の写真は掲載されていない。この書籍は建築工事を安全に行うための 2 冊の英語書籍の翻訳であり、そのまえがきには、「建設作業の機械設備について適当なる訳語を見出し得ないものが多い。したがって本書に用いた訳語について意味不明なる場合は此原語と対照して了解して貰いたい。」とある⁽¹⁾。建設の方法やましてや安全に対する思想には大きな隔たりがあった時代であろうから、的確に対応する訳語が存在しないことも尤もなことである。この一覧に「猫車」という語が含まれていないことから、当時の建設現場では存分に使用されていた道具・用語であることが想像できる。

同書ではまず、第 9 章コンクリートの混合及打ち込みに「猫車及渡り路」という項が立てられており、「コンクリートを可搬混合機より其注充するゝ点に迄運搬する為めに、猫車を用ふる事屡々あり。⁽²⁾」との記述がなされている。この 1 文だけで、コンクリートを作ったその場から打ち込み場所に運ぶ道具として、猫車は普通に用いられている道具であったことが解る。

もう 1 か所、第 10 章一般的注意事項にも「猫車」の項が設けられている⁽³⁾。その 2 文目の「若し狭き戸口又は通路を此車を押し進む時には保護柄を取付けて、職工の手が打ち挫かれ又は潰さるゝ事を保護すべし。」は難解である。保護柄はどこに取り付けるどのようなもので、如何にして職工の手を保護するものが不明である。ここで現在の fig.1 のよう

なものではなかったことは確かであろう。

すなわち、高木 1929[4]の記述における「猫車」は現在のものとは目的は同じであるが、形状は異なるものといえる。さらに、第 9 章の「コンクリートを注充する点へ猫車を運行せしむるために、高き且つ勾配を有する渡り路を設くることを必要とすることあり。」の記述では、運搬路のことを猫足場と呼んでいないこともここで確認しておく。

2.2 『讃岐遊覧スタンプ集～東の巻』1934 文献[1]の猫車

この書籍は、基本的には讃岐地方を遊覧した名所案内なのであるが、讃岐で見つけて驚いた特別なものとして「猫車」が写真付きで紹介されている。写真のキャプションとは別に「猫車に就て」の 1 ページが設けられている⁽⁴⁾。

定義 2. 容積 2 尺立方の小箱に車輪一輪をつけ、長さ 2 間くらいの柄があり、柄と車輪は離脱出来る様になっている。

この記述では具体的な大きさが分かる。一辺が 1 尺の立方体の体積を 1 才というが、この猫車は 2 才積みということであれば、積載容積は現在のものとほぼ変わらない。もしくは、一辺が 2 尺すなわち約 60cm の箱ともとれるが、その場合は 8 才積みということになり、現在のものよりもかなり大きな容積となる。車輪は 1 輪で、2 間すなわち 3.6m ほどの柄がついているという。Fig.1 のような現在の猫車の長さは 1.5m 程度であるから、この猫車の柄はかなり長いものであることがわかる。しかも、柄と車輪とは着脱可能であるともなっており、機能的にも異なるものであるとわかる。柄は 2 本であるとも書いていないので、駕籠のように前後に 1 本の柄を渡して 2 人で操作する形態なのかもしれない。

この文献自体でも、この定義 2 は百科事典に載っているもので、取材時に見つけた猫車とは違っていると述べている。



Fig.2 猫車の風景 [1]p.12 掲載

讃岐地方で見つけた特別なものとしての「猫車」の写真には長めのキャプションもついている⁶⁾。筆者の知る最も古い猫車の写真であり、大きさと形状に加え使用状態も分かるものとして貴重である。

Fig.2 の写真を見ると、1 輪の車輪がわずかに見える。荷物を積む場所は箱でも器でもなく、左右方向には平らになっているものと推測される。積載されているのは米俵サイズのもの 2 俵と麻袋のようなもので、2 人掛りで重たそうに運んでいる。

定義 3. 狭い道でも押して行ける車。一つ輪の車、2 本の腕を持つ。両腕に結んだ紐を肩にかけ重い荷物を運ぶ。何処でも見られるものではない讃岐特有のもの。

写真キャプションにも「重い荷物を運ぶ」とあるように、この猫車はかなり大きいもので、積載荷物もかなりのものであるろう。写真の前方のひとは一人で操作しているようであるが、後方では 2 人で協力している。形状の上では、積載面を曲げることによって荷物の収納安定性を増し、爪を兼用するように工夫されているところが特徴である。

2.3 『皇農新風土記～食糧増産第一線を征く』1941 文献[8]の猫車

丸山義一 1939[7]と丸山義二 1941[8]とは句読点 2 か所の違いだけのほぼ同一の文章の再録である。全 8 ページほどの文章で、猫車はその最後の 1 ページ弱のみの記述である⁶⁾。内容は 1938 年 12 月に岡山の大規模農場を訪ねたリポートであって猫車が主題ではなく、それについて書かれている分量も少ないのに、章のタイトルは[7]が「猫車を押す百姓」、[8]では「^{コリンシャ}猫車」となっている。文章の中に直接の言及はないが、筆者の心に猫車がつよく印象に残ったものではないだろうか。特に後者ではタイトルに「コリンシャ」とルビまで振ってある丁寧さである。

コリンシャとは孤輪車のことで、現在も使われている猫車の別称である。筆者の知る限りでは、コリンシャという呼称はこの用例が最も古い。

2.4 『農用孤輪車に関する実験～序報』1952 文献[10]の猫車

これは、農業における運搬労働の合理化を目的とした論文で、猫車の性能について実験を行った報告である。そのなかで、序文⁷⁾をはじめ、猫車の説明がいくつかなされている。

序文の冒頭に、「広島県の賀茂郡、阿佐郡、佐伯郡等の一部に分布している農用孤輪車は、約 60 年前に香川県から移入された」などとある。これは郷土研究社 1934[1]の記述内容とも、岡山で見た猫車の光景が印象的であった丸山 1941[8]の記述とも呼応するものである。

実験対象となった猫車は 2 種類あり、ひとつは「広島県で最も古くから普及している賀茂郡乃美尾村の猫車」であり、もう一方は「ヒリッピン政府の注文により同国規格に基い

て日本製鋼所で製作した鉄製孤輪車」である。これらの車に荷重をかけて実験するわけであるが、前者には車体のほぼ中央に、後者には積載皿の中央に荷重は積まれた。この記述で分かることは、後者にはある積載皿が前者にはないことである。すなわち、前者は現在の猫車とは形が違うことが明らかである。後者は現在のものに近い形をしているのかも知れない。

実験のひとつに、ハンドルを腰の高さに持ち上げた状態から、車の縦の中心線を軸にして横に傾けるものがある。この実験の説明のなかに、広島孤輪車は 29 度傾けると車の爪と軸受とが共に地面に接する構造であることが書かれている。その程度傾けただけで車軸が地面に接するということは、fig.1 のような現在の猫車よりも車軸がかなり左右に長いものであったことがわかる。

2.5 『荷物運搬車告知板』 1951 文献[9]の猫車

国鉄線という雑誌は当初、国鉄現業職員向けの内容で発行されており、のちに一般向けの国鉄PR誌になっていった。まだ内部向けの雑誌であった時代、現場で使われている機器を紹介する記事が時折掲載されており、この文献[9]では駅構内で荷物を運搬する車両が紹介された。蓄電池車、猫車、手押車の 3 種類が各 2 枚の写真入りで掲載されていて、それぞれ簡単な説明文がついている。

定義 4. ホームや積卸場の小運搬に使用する手曳きの二輪車。荷受け面が弯曲したものと平面のものがある。標準型は長さ 1.6m、幅 52cm、自重 60kg、安全積載量 300kg。

このなかの「手曳き」とは、文字通りに手で引くことのみならず、手で押すことも含む、手で操作するという意味である。これに対し、手押車は 3 輪か 4 輪で使用時も不使用時も車輪だけで接地している点が猫車とは異なる。猫車は 1950 年 10 月末現在で国鉄の駅全体で 10257 両所有するとの記述がある。

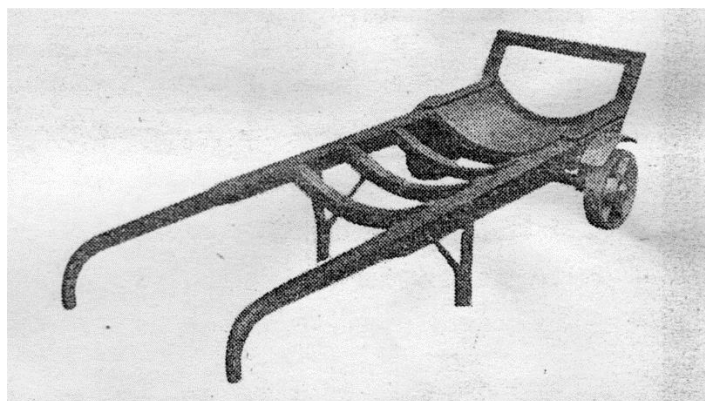


Fig.3 荷受け面が弯曲している猫車 [9]p.33 掲載

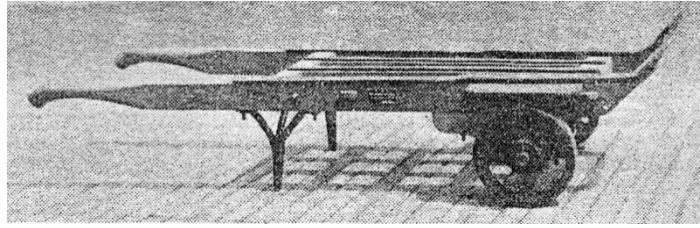


Fig.4 荷受け面が平面の猫車 [9]p.33 掲載

2.6 『国鉄ことば物語』 1985 文献[2]の猫車

国鉄が民営化されるのは 1987 年であるが、その直前に国鉄の現場で使われたことばを集めて編まれた書籍である。猫車でなく「ネコ」という項が設けられている。

定義 5. 運搬用手押し車(2 輪車)の俗称。

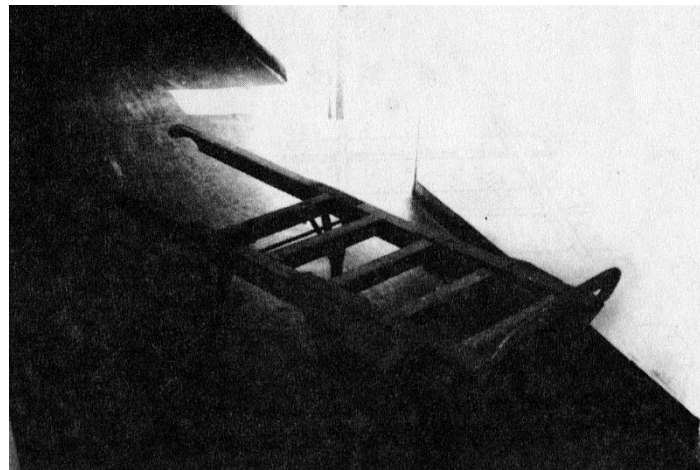


Fig.5 ネコ [2]p.131 掲載

3. 7 猫車まとめ

注意すべき点は、2.5 節の「荷物運搬車告知板」と 2.6 節「国鉄ことば物語」でもそうであったように、国鉄の荷物輸送の現場においては長きにわたって猫車は 2 輪であったということである⁽⁸⁾。宅配便に席卷されるまで、日本の荷物輸送は鉄道荷物と郵便小包が担っていた。その片翼である鉄道の現場で猫車は 2 輪車であったということは、それが一部の特別な現場の呼称であるとして片づけられるものではないと言える。

したがって、1 輪でも 2 輪でも、器があってもなくても、ゴムタイヤであってもなくても、鉄製でも木製でも、いずれの場合でも通用する言説でなければ、猫車の語源とは言えないことをここで強調しておく。

4. 猫車の語源

猫車がいかなるものであるかが整理できたので、その語源として流布する諸説を検討することとする。容易に得られる語源説には以下のようなものがある。

説 1. 建築で狭い足場を猫が通るような足場の意味で猫足場と言い、そこを通ることができる車なので猫車という [3][12]

説 2. 猫車を横に伏せておいた形が猫の寝ている姿に似ていることによる [3] [12]

説 3. ネコのようにゴロゴロと音をたてることから猫車と呼ぶようになった [12]

説 4. 漆喰を練った練り子を運ぶために用いられたので、略され「ねこ車」になった [12]

説 5. 猫車を押す様子が猫の後ろ足を持って前足で歩かせる形に似ていることによる [3]

これらの説はいずれも語源と断定するには根拠が薄すぎる。

最もよく唱えられている語源が説 1 であろう。しかし、猫車が 1 輪のものだけでなく 2 輪のものも含むこと、建築現場の狭い足場が猫足場と呼ばれてきた事実が文献の上で確認できないことから、この説は現在の 1 輪の猫車に合わせて作られたものであると言える。

説 2 も、過去の猫車の形状からは説明がつかず、現在の猫車から連想して唱えられたものと断言できる。

昔の猫車が写真のようにゴムタイヤではなかったことから、説 3 の擬音表現はおかしい。木製もしくは日本国有鉄道 1958[6]にあるように鉄製の車輪であったであろう。そうであればゴロゴロよりも甲高い音がする。

現在の猫車のように器があれば、練った漆喰をそのまま運ぶこともできようが、木製のすのこ状のものではそんなことはできない。液体を運ぶには、たらいに入れてそれを積んで運ぶことになる。そんな道具のことを練り子を運ぶための器具と言い切る設定には無理がある。よって説 4 も確実性は限りなく薄い。

猫の後ろ足を持って前足で歩かせるということは一般的な猫との触れ合いの形であろうか。そもそもほかのペットでなく猫である根拠が薄弱である。確かにそれをすれば形は似ているだろうが、体育の準備体操で過去に行われていた 2 人で行う「手押し車」のほうがよっぽど連想しやすい存在であろう。説 5 もこじつけの域を超えるものではない。

ところで、猫足と呼ばれる工芸品の加工方法がある。木工品の食膳や仏具などの接地部分を、まっすぐな円柱や円錐台とするのではなく、柔らかい曲線状に仕上げたものである。和風の場合は猫の後肢を連想させる曲線に、洋家具では前足のような曲線が多いようであ

る。いずれも、実用性よりも装飾的な加工であり、この呼称は自然に受け入れやすい。



Fig.6 猫足の椅子と直パイプ脚のテーブル

猫車はリヤカーのように引っ張るのではなく押して使用するから、大きな力をかける握り部分には扱いやすい加工が施され、木製であれば fig.3～5 のような加工が施された。そして、[9]の説明にあるように、この形が猫の手のように見えるから「猫車」と呼ばれるようになったというのが語源であると、筆者は結論する。

説 6. 曳手が猫の手のように曲っている所から生じた名称 [9]

この説であれば、1 輪でも 2 輪でも、器があってもなくても、ゴムタイヤであってもなくても、いずれの場合でも通用する。柄が鉄パイプである現在のものでは、木製の場合よりも強度があるからパイプ径を細くできるので、プラスチックで製造した部品をパイプの上に被せることで使いやすい握り部分を形成している。それゆえ、猫の手の形は連想しにくくなっている。

国鉄ことば物語 1985[2]のネコの項には次のような語源が載っている：

説 7. 手押車の柄の形状がネコの尻尾に似ているところからこのように呼んだ [2]

掴む部分が尻尾というのは気分的に持ちにくそうであるし、2 本出ている部分から尻尾を連想するのもなかなか難しい。猫の手(または足)と考えるのが妥当であろう。

高橋 2001[5]は娯楽的な辞典ではあるが、ここにも猫車の項があり、一輪車としての語源が記載されている：

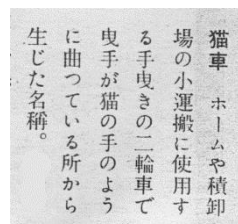
説 8. 取っ手を持つ手が猫の手のように見えるから。[5]

操作する人間の手の形が語源としてあるが、これは説 5 に近い解釈であろうか。この書籍

が編まれた時代を考えれば、木製の把手の猫車はほぼ存在しなかったであろうから、器具の形を思いつかなかったことは想像に難くない。

5. まとめ

本稿では、これまで語源が不確実であった「猫車」について、その用語が差し示す車のヴァリエーションを文献渉猟により明らかにし、現説の不確実性を指摘した。そして、種々の形のある猫車のどれにも矛盾しない語源「説 6」を探し当てることができた。これで語源論争が終結することを期待する。



鉄道事業者向けの器具を販売している飯島機工という会社のウェブサイトを見ると、本稿で述べてきたものとは別の「ネコ車」が載っている。それは保線工事などに使う部品や工具を載せて、車輪を鉄道レールの片方の上で転がして運ぶ運搬器具である。レールの頭の上はわずか 50mm ほどしかないが、その細いところををゴロゴロ転がして運ぶので、それこそ説 1 や説 3 が当て嵌まりそうな器具である。販売者はネコ車と表示しているが、現場ではどう呼ばれているのであろうか。筆者は現物を見たことがない。今後の課題としたい。

注記

- (1) 筆者において漢字は現行書体に改めた。かな遣いは原文どおり。以下同様
- (2) コンクリートを可搬混合機より其注充するゝ点に迄運搬する為めに、猫車を用ふる事屢々あり。此仕事は多くの災害を伴ふものなるも、往々にして看過又は無視するゝものなり。先づ第一に猫車は何等故障の無きものなるを要す。若し木造なる時は、其車の何れの部分にも障害を惹起すべき刺片を有せざるものなる事を確かむべし。金属製猫車は多く用ひられるゝも、これも亦其欠陥及弱所無きやを時々検査すべし。
多くの建築工事には、コンクリートを注充する点へ猫車を運行せしむる為めに、高き且つ勾配を有する渡り路を設けることを必要とすることあり。此等渡り路は若し其構築に不注意にして、且つ強度の不足し、且又維持方法の不良なる時は災害を惹起し易きものなり。(ここまで 13 行、以下 2 行略)
- (3) 各猫車は手入れの良好なるやを見るべし。若し狭き戸口又は通路を此車を押し進む時には保護柄を取付けて、職工の手が打ち挫かれ又は潰さるゝ事を保護すべし。(ここまで 3 行、以下 13 行略)

- (4) 単に猫ともいふ。一種の土運搬器容積 2 尺立方の小箱に車輪一輪をつけ長さ 2 間位の柄があり、柄と車輪とは離脱出来る様になってゐる（以上は大百科事典に記されてゐる猫車の説明であるが、他地方に於て猫車を使用されて居ないとすれば、当讃岐地方に限られて居るわけである。

して見ると右の説明は現在使はれてゐる図の如き猫車とは多少の相違を見る。最も猫車には大小あったが最今では小さいのが多く使用されてゐる（ここまで 6 行、以下 5 行略、閉じ括弧欠落・「最も」は原文通り）

- (5) 讃岐の農村には珍しい車がある

どんなに狭い道でも、どんどん押して行ける車。

それは一つ輪の車、両腕を持った怪物だ図の如く

両腕に結んだ、紐を肩にかけ

農夫は重い荷物を運ぶ、何処彼処では見られない、讃岐異風景の一つだ。

- (6) それから私はその家の近くの田圃のなかで忙しさに、いや、悠々と一輪車の野車(コリン車といふ)に土塊を積んで、地均らしをやつてゐる M・H 君にあった。遠くからみると櫛の木を思はせる精悍な青年で、日に焼けた顔、声をかけると麦わら帽子をぬいで K 氏に挨拶の笑顔をおくってくる。歯だけが白く眼立つ。

「あの男程計画的に仕事をする百姓は、こゝでもめづらしいのです。ホラごらんささい、あのコリン車を押して行く恰好を。肩が張りきつて見えるぢやありませんか」

私は、M・H 君夫婦が故郷のふるい土に訣別して、ここに移ってきた心の歴史をいつかじっくりと書いてみたいと思つてゐる。

- (7) 広島県の賀茂郡、阿佐郡、佐伯郡等の一部に分布している農用孤輪車は俗に猫車といわれ、約 60 年前に香川県から移入されたもので、農道の狭い所或は坂道などで運搬に用いられている。この車の最も広く分布しているのは、香川、岡山県等ではないかと思われるがこの車は安価で使用上の便利が多いにも拘わらずその普及は必ずしも広くない。（ここまで 6 行、以下 4 行略）

- (8) 日本国有鉄道 1958[6]には猫車の項があり、そこでは猫車は土木工事用の 1 輪車であると解説されている。器は鉄製、把手は木製と鉄製の混在する時代であることがわかる。以下引用：

土木工事においてコンクリート、または土砂を運搬するのに用いられる運搬車で 1 輪のもの。大きさは各種あり、人夫 1 人で両手でハンドルをもって押す、コンクリート、または土砂を入れる部分は鉄板でできており、ハンドルは木のものが多いが鉄製のものもある。車は古くは鉄製のものが多かったが、近年用いられているものはゴムのソリッ

ドタイヤをつけたものも多く、軽く扱えるようになっている。鉄製容器の下には 2 箇所
に鉄製の足があり、置くときには車と 3 点で支持しておく。(ここまで 12 行、以下 11
行略、図版あり)

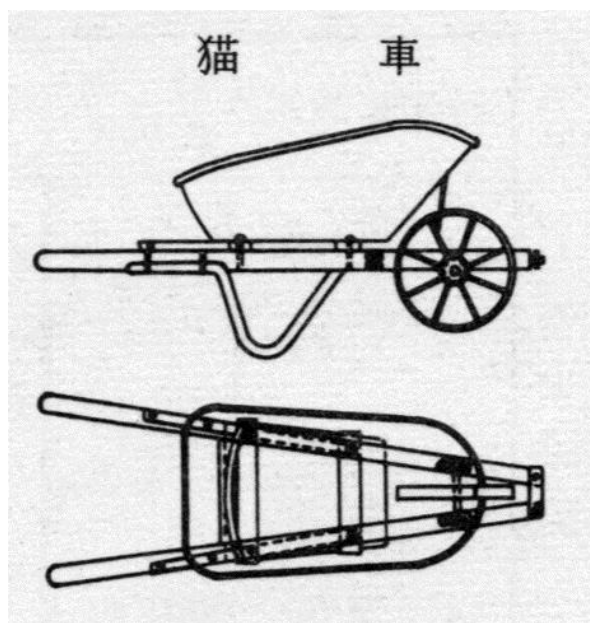


Fig.7 土木工事用運搬車 [6]下巻 p.1453 掲載

参考文献

- [1] 郷土研究社編, 讃岐遊覧スタンプ集, 東の巻, 1934, 郷土研究社.
- [2] 国鉄ことば物語編さん委員会編, 国鉄ことば物語, 1985, 交通協力会.
- [3] 小松寿雄, 鈴木英夫編, 新明解語源辞典, 2011, 三省堂.
- [4] 高木源之助訳, 建築工事と安全, 1929, 産業福利協会.
- [5] 高橋政士編, 深迷怪鉄道用語辞典, 2001, 海拓舎.
- [6] 日本国有鉄道, 鉄道辞典, 1958, 交通協力会.
- [7] 丸山義一, 猫車を押す百姓, 1939, 有馬頼寧編 農村現地報告 pp.372-380 に所収, 春陽堂.
- [8] 丸山義二, 皇農新風土記: 食糧増産第一線を征く, 1941, 河北書房.
- [9] 旅客局・貨物局, 荷物運搬車告知板, 1951, 国鉄線, 6 巻 12 号, p.33.
- [10] 涌井学, 農用孤輪車に関する実験(序報), 1952, 農業機械学会誌, 13, pp.41-44.

ウェブサイト

- [11] 飯島機工, アルミ運搬車(ネコ車)NU-35, 2016.11.21 閲覧.
- [12] ルックバイス, 語源由来辞典, 2003 開設, 2016.11.21 閲覧.

《2017.1.11 受理》

【論文】

アリと私たちをつなぐもの

—— ミクロ経済学並びに K. コシークの視点から見た経済のエッセンスについて ——

古山 友則

序

経済とは何か？この問いを1本の論文であつかうと宣言する者がいれば、研究者は素人だと断じるであろう。しかし、経済学の専門家になるわけではない学生が教養の授業で学ぶとき、経済についての全貌を知りたいと思っているにちがいない。すくなくとも、経済について何かを知りえたと思いたいのではないだろうか。

私はこのエッセイで、経済学を「経済とは何か」という問いにホーリズム（全体論）を適用して答えるための方法としてあつかう。¹ もちろん、経済学の領野は広いので、「どうすればお金を稼ぐことができるか」や「この企業の時価総額は今後どのように進展するか」という問いに答えることも、この学科の仕事に含まれる。しかし、本稿では視点を限定して、現代ミクロ経済学の成果を延長した結果、経済についてどのようなエッセンシャルな見方ができるかを論じたい。対象とする読者は研究者ではなく、広く経済について関心をもつ学生を念頭におく。

1 経済と経済学

私たちは21世紀の世界を生きている。この世界を理解するにあたり、経済は大きい要素を占めているといってよいだろう。

「経済とは何か」という問いが、私たちの考察の出発点だ。しかし、“What is x?” という単純な問いには本質論で答えなくてはならないから、答えに窮することが多い。「あなたはだれですか」と問われれば、職業や人間関係のなかでの役割、もしくは現在の気分をつうじて答えることができる。他方で「あなたはなんですか」と問いかけられると、たいていの人は答えに窮するであろう。同様に、経済の how であれば日経株価平均等の指標を答えに供することが、ひとまず可能である。だが、経済の what については答えにくい。²

¹ ホーリズムとは全体に部分の総和以上の意味があることを積極的に認める立場のことである。私は思想的ではなく、実証的な立場でこの観念をあつかう。なお本稿のテーマを詳しく敷衍すれば、ゆうに半年分の講義になりうる。したがって、このテーマを1本であつかった記述はエッセイのかたちを採らざるをえない。ここでは筆者が2015年度以来、安田女子大学で担当させていただいている教養科目「21世紀の経済」前半の理論的な骨子だけを述べる。

² 経済の how に答えようとすれば、経済の部分集合、つまり特定の有力企業の行動について記述したり、為替レートについて記述すればよいであろう。また別の答え方として、最も精細な経済史や経済学史を叙述することで経済の how に答える人もいであろう（J.A. シュンペーター『経済分析の歴史』は

まず、私たちは経済と経済学をしっかりと区別しておきたい。カメラにたとえていえば被写体が経済であり、それを撮る道具（カメラ）が経済学である。主体と客体のあいだに介在して、前者が後者を理解することを助ける分析道具のことを学という。私たちは本稿で「学」一般ではなく、経済についての学をあつかう。だから、経済とは何かについて知らなくてはならない。経済とはなんだろうか？

2 総体性としての経済（K. コシークのいうホリスティックな意味での経済）とは

経済が認識される側で、経済学が認識する側（の道具の集成）だということを述べた。しかし、こと経済にかざると、話はややこみいつている。

たとえば、私たちはアリを観察することができる。街ゆく人を観察することができる。けん玉のうごきを観察できるし、空に漂う雲を観察することもできる。だが「経済」を観察することはできるだろうか。

私たちは経済のなかを生きているから、自分が目にしたり、新聞に掲載された事実をつうじて経済を観察できると思う人もいるかもしれない。しかし、それは控えめに言っても、歴大な経済のごく一部でしかない。気をつけてほしいのだが、私たちが生きている現代の経済は、特定の独立したブロックではなく、システムになっている。

ここで「システム」と述べたものの意味として、私はカレル・コシークが術語としてつかった総体性という観念を思いうかべている。³ コシークによれば、総体性とは「現実をその内的諸合法則性において理解し、表面的で偶然的な諸現象の下に、必然的で内的な連関を暴露しようとする」立場のことだ。⁴ しかし、この暴露を遂行する哲学は次のような運命にしたがうと彼はいう。

「それらを最初に使用し、基礎づけた哲学だけの精神的所有物ではけっしてなく、徐々に共通財産へと移行する。ある概念の普及あるいは受容、つまりその概念が一般的承認に達する過程は、同時にその変身（メタモルフォーゼ）である。総体性のカテゴリーも、二十世紀になって、広い反響と承認を見出した。しかし、まさにそれゆえに、一面的に把握され、ちょうど正反対のものにひっくりかえされる危険、すなわち弁証法的な概念でなくなる危険に、たえずさらされている。」⁵

システムという言葉はよく耳にする。システムとは、切り刻んでしまうと性質が消えてし

この立場からの古典である)。しかし、本稿では経済の本質を総体性として記述する立場をとる。ここで総体性と書いた概念については後述する。

³ ベルタランフィやN. ウィーナーの知見に与すればシステムというべきであろう。しかし、私はチェコの哲学者コシーク（Karel Kosík）に倣って具体的総体性という概念をつかいたい。cf. コシーク（1977），38-63 ページ。

⁴ コシーク前掲書，38 ページ。

⁵ 同上，38-39 ページ。

まい、現存するまるとが1つになって、いまの機能を示しているようなもののことだ。典型的には生物のことを考えるとよい。生きもの1匹はシステムをなしている。死とは、このシステム性を失うことに他ならない。経済についても同様の見方ができる。私たちは経済という途方もなく大きい1匹のクジラの腹のなかに呑みこまれて生活しているとみなすことができるからだ。

しかし、経済をシステムとしての生物個体と同一視するだけでは十分ではない。生きものがシステムになっているのは、個体をなす構成要素のすべてが生存という目的に歴史的に奉仕してきたことからの帰結である。たとえば蛙の身体システムのシステム性は、個体が個体群のなかで選択を被ることで、環境にたいして即時的かつ良好に適応した身体機能が世代をつうじて複製されたことで獲得されたものだ。これにたいして、経済という実体が同種個体群の競い合いのなかで選択されたわけではない。

経済はシステムというより、正しくはコシークのいう総体性なのである。それは、経済の構成要素が物質（モノ）だけでなく、観念（コト）からも成り立っているからである。⁶たとえば、株式市場で株価に特定の分布が構成されているとしよう。いま人々がこの分布の変化を先読みしている仕方がaとbという別のパターンを示す場合、株価が数値集合として同一だとしても経済の実情が異なることは明らかだ。

したがって、参加主体の主観性も要素に数え入れた総体性としての経済は、外的対象として観察することがけっしてできない。私たちは経済の内側に陣取って、その一隅から全体を俯瞰的に理解しなくてはならない。これは大変なことだ。しかし、そのための道具（数理論理学）をつくり、クジラの腹のなかから全体を俯瞰しえたのが20世紀のミクロ経済学であった。⁷代表的にはK.J. アローとG. ドブルーである。でも、どうやって？ 抽象的な自己組織化する経済を公理系から演繹し、経験論の限界を突破することによって。⁸

3 シロアリの営巣について

もういちど、アリに登場してもらおう。とくにシロアリについて。アリは人間と並んで単位面積あたりの現存量が最も大きい生物である。日本ではそのことを実感できないが、もう少し低緯度の土地にいけば、アリが大いに栄えていることがわかる。⁹

⁶ このことは、景気循環太陽黒点説の物理学的解釈と経済学的解釈のちがいを比較することで明らかになる。西部 (2014), 193-198 ページを参照。

⁷ ミクロ経済学とマクロ経済学は、おなじ経済学の仲間でありながら、その性格はかなり異なっている。前者は演繹的な体系であり、抽象的な「経済」を構築することで実体経済にたいして含意を与える応用数学である。後者は実体経済の特定の部分集合のふるまいについて、統計学とモデル構築を応用して予測を立てる、どちらかといえば物理学に近い帰納的なサイエンスである。

⁸ 彼らは公理的方法と数理論理学の方法をつかって、一般均衡価格ベクトルの存在、コアの均衡への収束、一般均衡とパレート最適配分の同値性、等々を証明した。「自己組織化する」と書いたのは、家計と企業の数が大数になることで、彼らの意図とは無関係にコアが均衡配分に収束することを念頭においてのことである。

⁹ 本節での説明は松本 (2012) に負う。

シロアリは人家に被害を及ぼす厄介な面をもつけれども、すばらしい建築家としても有名だ。亜熱帯地域の平原にいれば、シロアリが共同で作り上げた蟻塚が立っている。その高さは優に人の身長をこえる程である。

シロアリの社会は女王アリ、ニンフ、大ワーカー、小ワーカー、大兵アリ、小兵アリというカーストをなしている。女王アリは毎日数百から数千の卵を生むとのことだ。孵化した幼虫のうち、女王となるのは1匹のみで、数匹がニンフ、あとの数百万匹は各種ワーカーである。ニンフは将来の女王と王の予備軍であり、ワーカーは蟻塚の維持・補修や栄養源の獲得など、細かい仕事を分担している。

人間は労働を市場で販売しなくてはならないかわりに自分で仕事を選ぶ権利をもつけれども、シロアリの世界では、幼虫たちはDNAのスイッチによって役割を先天的に指定されている。¹⁰ なぜそうした仕組みが形成されたのかということは興味深い問題だが、一言でいうと自然選択によって歴史的に形成されたということができる。深く探求すれば進化生物学の枢要なテーマにいきつくので、ここではふれない。¹¹ しかし、次のことにふれておきたい。蟻塚のなかで生活するシロアリ個体の大半をなすワーカーたちは、目が見えないのである。そのため、局地的な接触と嗅覚によって相互作用している。私たちは、目も見えず、言葉も話さず、人間とは比較にならないくらい少数のニューロン（つまり小さい脳）しかもっていないシロアリが、なぜ蟻塚のような壮麗な建築物をつくることができるのか驚愕してもよいだろう。¹²

その謎はまだ解明されていないが、個体としての能力がきわめて局限されていながら、個体の集まりが集合知¹³を生み出す機構がしだいにわかりつつある。シロアリの場合、女王アリが特殊なフェロモン（誘引化学物質）を発し、彼女の周りにワーカーが王室を築いていくにつれてワーカーが感じるフェロモンの濃度勾配が変化する。その変化に応じて、建築士としてのワーカーの活動が制御されていくことが立証されている。しかし、個々のシロアリはオーストラリアの平原に屹立しているような建築物を完成させたいという目的を共有して働いているわけではない。このことは驚異である。

シロアリは注目すべき例だけれども、シロアリだけがすごいのではない。自然界では多種多様な生物が集団をなして生存している。そして、1個体だけでは実現できない機能を、局所的な相互作用だけから大域的に現している。このことは現代の市場経済にもいえること

¹⁰ ただし、労働を財として供給できる市場が成立しておらず共同体原理が優越していた時代には、私たちの仕事は他者から義務として指定されるか、文化的に伝承されていたことを忘れてはならない。

¹¹ 関心のある方は木村 (1988) チャールズワース (2005) ドーキンス (2014) のような解説書を参照。

¹² シロアリはヒトのスケールにして数百メートルにも及ぶ建築物を、鉄骨もつかわず、身近なものだけでつくりあげる。しかも日射と巣の位置関係を最適化するために東西方向に平べったく、南北方向にとがった巣を製作することさえできる。岩場の裂け目を住居にするアリ集団（ロック・アント）の営巣能力が「ビュフォンの針」と同形式の数理を内在させていることについて、ケリー (2014), 373-374 ページも参照。

¹³ 群知能という呼びかたもある。知性 (intelligence) と称してよいかは議論のあるところだけれども、私たちが経験的に、そして無反省に知性と呼んできたものの内実が現象の側から批判されていると捉えるべきであろう。この批判の好例が、粘菌の研究によってもたらされた。中垣 (2010) 西垣 (2013), 170 ページを参照。

だ。蟻塚も現代の市場経済も、どちらもシステムとして現存しており、それをつくりあげた個体にとって、それが現存し、機能しているという結果は当初の目的によって規定されていない。局所的な相互作用だけから自生的に発生したシステムとなっている。ここで私たちは、文明の性質について A. N. ホワイトヘッドが発した言葉を思い出してよいだろう。

「われわれは自分たちが何をしているのかを考える習慣を培養しなければならないというのは、あらゆる教科書や高名な人たちの演説で繰り返し述べられている陳腐な文句であるが、完全に間違っている。その正反対が真実である。われわれが考えることなしに成し遂げることができる重要な作業の数を殖やすことによって、文明は前進するのである。」¹⁴

ここには全体が部分の総和を超えることへの着眼がある。これは難解な呪文ではなく、シロアリと私たちをつなぐ法則に他ならない。この法則を成り立たせる原動力が、自己組織化 (self-organization) というメカニズムである。¹⁵

4 スミスから現代へ

経済の理解に自己組織化という視点を初めてもちこんだのが、アダム・スミス (Adam Smith 1723-1790) であった。彼が経済学の父と称されるのは、このためであると言いたい。スミスは自由放任の環境下で資源配分について「神のみえざる手」が働くこと、市場と分業の範囲とが相互に拡充して国富を大いに高めることを説いた。¹⁶ スミスは重商主義 (貴金属の蓄積が富であるという考え) を批判し、富の概念を国民レベルの労働生産性へと刷新しただけでなく、経済に部分集合の総和以上の力が創発する条件について論じた真に重要な思想家であったといえよう。

だが、スミス以前にも経済は存在していたのではないか？ 人間が自然界にはたらきかけて自然を加工し、自分自身の生存条件を高めるという意味での経済活動、そして他者と貨幣的交換をつうじて関係し分業するという活動さえ、アリストテレスの時代から存在していたのではなかったか。

たとえば、アリストテレスは『政治学』のなかで国家と家の関係について論じている。¹⁷

¹⁴ ハイエク (1986), 70 ページ。

¹⁵ 自己組織化という概念の定義を 1 つあげておく。「自己組織化とは、システムの下位レベルを構成している多くの要素間の相互関係のみに基づいて、システム全体レベルにおけるパターンが創発する過程である。さらに、そのシステムの要素間で規定されている相互関係のルールは、全体パターンを参照することなしに、局所的な情報のみを用いて実行されている」(Camazine ほか 2009, 9-10 ページ)。

¹⁶ なんでも放任して自由にさせればよいというわけではなく、市場の機能を最大限に活用できるような制度とルールを前提としたうえで、自由に経済活動の意思決定をすればよいという考え方である。したがってスミスの思想を自由放任主義と呼称することは誤解を招く。彼自身は「自然的自由の体系」と述べていた。このあたりの事情については、田中 (2002) 堂目 (2008) 丸山 (2011) を参照。スミスの思想を現代に最も継承しているのは、ハイエクであろう。

¹⁷ アリストテレス (2001), 第 1 巻「国家と家政」。

ケネーは 3 階級間の物質循環と貨幣循環をくわしく論じ、J. スチュアートは市場についての理論を叙述している。

しかし、スミス以前にホリスティックな認識論としての経済学はなかったといえることができる。17 世紀までの経済学は、どちらかといえば法学の一分科として扱われていたからだとか、そうした理由からではない。スミスだけが経済の自己組織化性に着眼しえたことが重要なのである。とはいえ、彼が経済の自己組織化性——その本質についての解明は 20 世紀を俟たなくてはならなかったが——に気づきえたのは、彼の天才によるだけではなく、経済と社会の位置関係が、ちょうどスミスの生きた時代のスコットランドやイングランドで逆転を遂げたからであった。

近代以前のどこでも、社会は経済を包摂して経済を統制していた。しかし、近代にはいつて経済が社会を包摂し、社会を統制するようになる。¹⁸ これは複数の共同体間で発生した市場がシステム化して、逆に共同体を完全に包摂し、内部から解体した時代への移行を意味していた。産業革命と宗教改革以後の近代には色々な特徴が現れたけれども、経済が社会を統制すること、したがって社会が経済に従属することによって共同体が内部から解体されたことは、その最たるものであろう。この過程をつうじて、共同体は家計と企業というマイクロ単位に切りつめられ、私たちの生活は根本的な変革をとげた。併せて、政治学の大きい枠組でいえば、スミスは市場に「ホッブズ問題」（性悪説を仮定したうえで、悪にそまりがちな人間が集団をなして公序良俗をもつ社会を構築するためにどんなしくみが必要かという問題）解決の道すじがあること、しかも個々の市場参加者に意識させずにこの道すじを創発する力があることを示した。¹⁹

いったい、この力とはなにか。そのことを考えるためには「経済」「社会」という一見して自明な言葉を、すぐれて限定した意味でつかわなくてはならない。

5 社会という概念について

私たちは普段、経済や社会という言葉を多用しているけれども、その意味は人によって大きく異なる。本稿の目標は経済とは何かという問いに答えること（経済という概念のエッセンシャルな意味を現代ミクロ経済学の成果をふまえて解明すること）であった。

社会という言葉の意味もやさしくない。この言葉は多数の歴史を背負っているだけでなく、「社会」があたかも経験的対象として閉じているように錯覚し、私たちにとってその利用が自明性に到達してしまっているからだ。²⁰

¹⁸ 経済と社会という 2 つのドメインの角逐については、K. ボラニー『大転換』が鋭い考察を示した。そのほかにもダスグプタ (2008) が共同体と市場を 2 つの社会構成原理として捉え、経済の理解に応用している。

¹⁹ 商業（コマース）が社会に優越する以前、つまり封建領主が権力を握っており、モノのうごきに強く介入できた時代には、「社会」という単位の秩序を維持するために君主のカリスマが必要であった。たとえばマキャヴェリ (2001) に登場する事例、とりわけヴァレンティーノ公の統治術を見よ。

²⁰ Benn (1967) が社会概念の変遷を明確に整理している。なお社会という語の意味を系譜学的に考察した

社会とは何か。私たちは厩大な人間の集まりとして社会を構成している。かの J. ベンサムは社会をそのメンバーの集合とみなした。²¹ ベンサムは、社会をなすメンバーの個々の快の総和を最大化するように行為せよ²² という功利主義（最大幸福の原理）を行為倫理の原則とした。それゆえ、彼がメンバーの集合という社会概念を利用したことは目的にかなっていた。他方で『推測と反駁』の K. ポパーのように、社会という実体などなく、個人の行動だけが存在するという主張も根づよい。

しかし、時間をつうじて再生産されていく単位として特定の社会を観察した場合、「その社会」の本質はたんなる人の集まりには還元できない。詳しく論じる余裕はないが、社会とは単なる人の集まりではないという立場を私はとる。“What is society?”という問いにたいして、私はそれは、人と人のあいだで意識的、あるいは無意識的に共有されているルールの集合だと答えよう。

この考え方は人間をポリス（古代ギリシャの都市国家）における社会的存在と規定したアリストテレス、K. マルクス、そして和辻哲郎らの系譜に連なっている。社会を「その社会」として存続させており、人と人のあいだを媒介して人びとの振舞いを誘導するルールの集合は昨今、制度（institutions）と総称されるようになった。しかし、この意味でのルールが社会を固定化するのではなく、進化させていくことを理解するために、R. ドーキンスの文化子（ミーム）という術語を充てたほうがよいだろう。

端的に言えば、社会とは「 x しなさい/してはいけません」という義務・命令文の x に入るルールの集まりである。これが社会の本質をなす。たとえば、年配の人に会ったらあいさつしなさいと躰ける家庭は多いだろう。あいさつしなかったら社会的に抹殺されるというわけではないから、このルールに罰則はついていない。しかし、たとえ比較的ささやかな行動でも、他人の気分を害したり、約束を破棄したりすれば将来に仕返しを招くであろうし、窃盗に及べば刑罰を被る。私たちが属している日常を構成するルールの拘束力には濃淡があるけれども、特定の人間集団をいまの姿で秩序化している本質は、人と人のあいだで作用しているこうしたルールの集合なのだ。個体としての個人が死んだとしても、社会はルールの集合としての自己を複製しつつ進化していく。この意味で、社会学や経済学は特定の人間を研究する学ではないことを付言しておきたい。それらは、大数の人間が集まったときにどんなルールが発生するかという問題を研究する学である。²³

社会の本質が良好な文化子（ミーム）の集合として進化した場合、その社会は共同体としての秩序をもつ。これはホブズ問題の1つの解決である。ただし、微細な初期条件や局所的条件によって瓦解しうる、偶然的な解決だといわなくてはならない。くわえて、共同体は

文献として市野川（2009）を参照。自明性はときに暴力に、ときに至上の利便性へと変貌する。私たちの日常は自明性の層によって支えられている。

²¹ ベンサム（1967）、83 ページ。

²² ベンサムの「行為」概念は社会政策のような公的施策も含むことに注意されたい。ベンサムの功利主義については古山（2017）を参照。

²³ なお社会学では、進化的に獲得されたルールが翻って、個々の人間や特定の集団にどのような影響を及ぼすかについても研究している。社会学の基本的立場については A. ギデンズの教科書などを参照。

構成メンバーがたがいのことを知悉していなくては成り立たないから、規模の拡大につれて情報上のコストが飛躍的に増大する。そのため、一定規模以上の大きさにはならない。²⁴ 共同体の秩序は愛郷心にも似た帰属意識を要求するが、後述する市場システムの秩序には、そうした意識づけは見られない。そのかわりに、選択する主体としての自己意識の強化と、システムとしての自律性の強化をもたらす。

6 経済という概念について

前節では、社会の本質が人と人のあいだに介在し、人びとの振舞いを規定するルール of the 集合であることを見た。これに比して経済とは、財（市場で売買可能で価格のついたモノ・サービス）の所有権のうごきを規定するルール of the 集合である。市場をつうじて財の所有権が、ある人から別の人の人に移るとき、貨幣が逆方向にうごくことを思えば、経済というルール of the 集合は同時に貨幣のうごきを規定するルール of the 集合でもある。²⁵

生態系をなす個々の生物とは異なり、人間はこのルールに介入することができるから、財と貨幣のうごきを規定するルール of the 集合を解明すれば（もしくは解明したと錯覚するだけでも）経済政策に影響が及ぶ。ただし、ミクロ経済学の立場から見れば、大数の家計と大数の企業が市場をつうじて局所的に相互作用するなかで、個々の家計や企業には目的として意識されないにもかかわらず、全体のレベルで創発するルール（自己組織化するルール）が解明すべき対象となる。

ミクロ経済学で登場する家計と企業の行動原理は、「自分の利害を優先すること」だけである。この行動原理は公理の1つとして仮定される。すなわち、家計は賦存と株式配当からえた予算の制約下に効用を最大化すべく、自分の選好にてらして消費可能性集合から財を市場で需要する。企業は既存の技術制約下に、投入可能な財集合をくみあわせて利潤最大化をはたすべく、適切な量の財を市場に供給する。²⁶

しかしながら、ミクロレベルでの行動原理がこれだけ単純なときでさえ、財の全体集合がマクロレベルで特定のパターンに帰結することが示された。もちろん、自己利害を優先するという行動原理は共有しても大数の家計はたがいに選好を異にし、大数の企業はたがいに技術を異にしているから、その意味での差異は考慮されている。これらの異質な家計と企業が市場で相互作用することで、**anything goes** ではない、どんなルールが発生するというのだ

²⁴ この限界を越えるために、共同体はモノをうごかす原理として交換、互酬、贈与という3つのパターンを導入している。このパターンのうち、交換が普遍化して共同体を包摂し、企業と家計という主体に閉じ込めたのが現代の経済である。

²⁵ 財をうごかすルール of the 集合としての経済には、市場での交換から派生する権力以外のルールも存している。すなわち、互酬と贈与がそれにあたる。しかしながら、市場が互酬と贈与よりも優勢になるからこそ、経済が権力としての本質をもつのである。

²⁶ この選択行動は制約条件下の最大化問題という数学に変換される。この手順と工夫にミクロ経済学の演繹的方法が集約されている。したがって、ミクロ経済学の本質的成果は定理の集合という形式をとる。現代的な要約として Ichiishi (1983) Starr (2011) などを参照。

ろうか？

結論からいえば、どの家計や企業もそんなことは念頭においていないにもかかわらず、「パレート最適配分」という財の配分ルールが大域的に創発する。これは市場に参加している家計と企業のうち、どれか1つでもその配分を変更すれば、かならず他のどれかの効用ないし利潤が損われてしまうような配分である。この帰結はナッシュ均衡となっており、社会的に見て明確な基準で浪費のない財の配分の1つである。注目すべきことに、この帰結は設計されたものではなく、局所的な相互作用のみから創発したものなのである。²⁷

だが、一度創発したシステムを私たちが知識として獲得すれば、そこに操作可能性の余地が生じる（市場システムのことを十分に理解したあとでの話だが）。この可能性を歴史的に過大評価したのが共産主義思想であった。ソヴィエト連邦が20世紀末に崩壊したことは、マルクス主義の没落という側面だけではなく、ミクロ経済学が獲得した結果の実証という側面をもつ。

7 モノはなぜうごくのか

「経済とは何か」という問いにたいしては、社会の場合と同様、財に「 x しなさい」と命じるルールだと答えればよい。これは個々の財に移動を命じるルールの集合となっている。社会のルールを発しているのは人間であり、これらのルールはある程度意識されている。しかし、経済において財にそのルールを命じるのはなんだろうか。それは、私たちの利害動機の膨大な集まりである。

ここで、ごく単純に「モノはなぜうごくのか」と問いかけてみよう。たとえば、チリのセントラルヴァレーで生産された葡萄が日本に空輸されるのはなぜだろうか。

モノはなぜうごくのかという問いにたいしては、視点によって答え方がちがう。まず、物体の運動をあつかう専門分野として物理学の一分科である力学が思いつく。力学は身近な球や車体、建築、そして天体にいたるまで、物体に力がくわえられたときの結果を定量的に追求することができる。力学的に言えば、チリの葡萄が東京に移動したのは、そこに力がくわえられた結果である。飛行機が飛んだのは、ジェットエンジンのタービンが回転し、機体が揚力を獲得したからである。そして、摩擦と慣性によって、葡萄の入った箱が機体の底面に沿って空間を移動したからである、等々。すべての初期条件を入力すれば、運動方程式から葡萄のうごきを計算できる（正しく復元できる）であろう。

しかし、なぜそうした力がくわえられたのか。素朴に考えると、チリの物体（葡萄）が東京にまで移動することは、かなり大変かつ不自然なことである。

実はミクロ経済学も、モノはなぜうごくのかという問いに大きくかかわっている。ただし、ミクロ経済学は価格のついたモノをあつかうし、一般にはモノだけではなくサービスもあ

²⁷ このことの理解にはモデル思考が不可欠であった。とくに L. M. ワルラスと F. Y. エッジワースがつくったモデルがミクロ経済学の基礎をなす。

つかう。これらを総称して財という。ミクロ経済学の考え方は、財のうごきを規定するルールに照準を合わせている。これらの財は人間の利害動機によってうごくから、ミクロ経済学は人間の利害動機を解明する学であるといっていよい。ただし、特定の個人を対象にするのではなく、統計的にみて大数の家計と企業が集まり、自由にその利害動機を行使したときに、財の全体集合をうごかすルールにどのような構造が創発するかを対象にしている。ここではテクニカルな詳細を省いて結論だけを述べなくてはならないが、現代ミクロ経済学の意義は、この構造が創発して自己を複製するようになった（自己組織化するようになった）空間の本質を解明したことに存する。²⁸

この空間は、私たちの主観を内側から規定している。たとえば、経済が社会をますます包摂していくにつれて、モノのうごきは価格のついたモノ（すなわち財）へ集中強化されていく。その結果、私たちにとって自由の観念は消費財選択の可能性の拡大という経済的な自由へと矮小化されていく。本来は多様な価値にひらかれているはずの自由が、貨幣の使途をできるだけたくさんの消費財に拡大することができるという 1 次元的な意味しかもたなくなつたとすれば、矮小化以外の何物でもないであろう。

これは、ドブルーとスカーフが 1963 年に提出した定理を定性的に解釈した言明である。彼らがモデルで記述した抽象的な経済は、現実の経済のなかでくりかえし創発する権力なのだ。そしてこの力は、私たちの主観を利用して再生している。私たちが自由意志だと思っておこなっている行為が、抽象的な市場経済という権力の空間をつくりだす。

8 創発システムとそこから派生する権力

ここに至り、ミクロ経済学の立場から経済とは何かという問いに答えることができる。経済とは、自由意思の行使を消費財選択の領域に限定することでこの領域を拡張し、モノ・コトを財に変換し、財集合をパレートの意味で最適な配分へとたえず移動させていく（そのように私たちの行動の合理性基準を強制していく）権力である。これが、20 世紀後半のミクロ経済学の成果をふまえた回答である。経済は私たちの意思決定を財の選択という領域に限定し、自由な意思決定をおこなっているという了解を家計と企業に与えることで、ますます私たちの意思決定の可能性を財の選択という領域に限定していくといっていよい。

この記述がトートロジカル気味になったのは、経済が私たちの自由意志をつうじて自己のシステムとしての権力をたえず再生していくからである。したがって、経済と経済学につ

²⁸ 細かいようだが、時空間ではなく空間と書いたのはミクロ経済学が現実においてながれる時間を対象にしてはいないからである。ミクロ経済学は抽象的な経済をあつかう。ちなみに、力学と経済学の比較はおもしろい。それはこの両者が似ているからではない。L. ワルラスが H. ポアンカレから示唆をえて、力学の均衡概念とのアナロジーでミクロ経済学の基礎をつくってから 1 世紀ほどしかたっていない。しかし現在から振り返ると、2 つの学科の理論としての性格は大きく異なるといわざるをえない。力学は物体に原因としての力が作用したときの運動結果を追求するが、その学としての体系は人間がいようとまいと関係がない（モノを物体といいかえたのは、そのニュアンスを出すためであった）。観客が多いときに月が発奮して公転速度が大きくなるといったことはない。

いて思考する者にとって、「自由とはなにか」という問いかけがいつも背中合わせになっているといえよう。

上述した権力空間としての経済は、J. ベンサムが万視塔（パノプティコン）を設計したときに示唆したタイプの権力装置の社会的普遍化という側面をもつ。この点については、他日に再述の機会をもちたい。²⁹ いま私たちが注意すべきことは、アロー、ドブルー、スカーフらが抽象的な経済を公理的方法によって提出して初めて、経済とは何かという問いに一定の答えが提示されたことだ。彼らの数学をつうじて初めて、私たちは1匹の巨大なクジラの腹の内側から、このクジラを俯瞰できるようになったのである。

しかしこの結果、私たちは私たちの環境が所与としての自然ではなく、人為であることに気づく。この知こそ、私たちにとっての環境³⁰ をシステムではなく、コシークのいう総体性へと転化する契機である。そして経済学はシステムにたいする客観的な知ではなく、そのシステムを内側から認識する者たちの主観性がシステム維持にはたらくような権力の存在を開示する「総体性」（コシーク）の知であることがわかる。

9 総体性としての社会と対峙するという課題

私たちは経済が総体性としての性格をもつことを知ったことで、行動の変化をつうじて環境を制御できる可能性に気づく。経済が客観的な所与ではなく、総体性であるとすれば、それは変革できる。

コシークによれば、本来の総体性のカテゴリーは二十世紀になって観念論的解釈を被り、内容を損ってしまったという。³¹ そうした見解には、論理実証主義や物理数学の無批判的な適用によって、経済にたいする本質論が欠落した歴史のことが考慮されていたように思う。³²

しかし、私たちがこの権利を行使すること（責任を履行すること）を次第に困難化している別の要素に言及しなくてはならない。それは、テクノロジーの急速な拡大である。

新しい技術の導入が旧来型の仕事を陳腐化し、失業者が労働市場で再雇用されるよりも速いテンポで次の技術が到来することで生じる構造的な失業のことを「テクノロジー失業」という。³³ 矢継ぎ早なテクノロジーの到来は、一部の人びとにとっては襲来となり、生活世界に無数のデバイドを張り巡らせる。他方の人びとにとって、この現象は新しいビジネスモデルの可能性として認識されるので、財のいわば水平的うごきを制御する経済的権力は、財の垂直的うごきともいえるべきイノベーション乱立の舞台と化す。当然、自由にできる所得の

²⁹ とくに、このタイプの権力が自然科学という知のカテゴリーと親和性をもつことについては古山 (2017) を参照。

³⁰ むしろユクスキュルに倣って環世界というべきか。

³¹ コシーク前掲書、39 ページ。

³² とはいえ、コシークが彼の本を書いていた当時、すでに一般均衡論は萌芽していたのだが。

³³ ブリニョルフソンとマカフィー (2013)、第3章を参照。テクノロジーが人間社会に及ぼす影響を論じた研究としてケリー前掲書のほか、カプラン (2016) も参照。

格差という意味での経済格差も拡大する。テクノロジーの展開速度が人類史上例を見ないほどに大きい昨今の状況では、既存の経験による判断が妥当しないケースも生まれてくる。

こうした状況にたいして、I. イリイチが 1973 年に発した産業社会批判は、いまなお鋭い舌鋒をもって私たちの社会の本質を抉っているように思われる。

「大量生産の限度なき成長が環境を敵対的なものにし、社会の成員が固有の能力を自由に行使することをできなくさせ、人々をたがいに切り離して人工的な殻に閉じこめ、極端な社会の分極化と分裂的な専門化を促進することで、共同体の組織を掘り崩すとき、あるいは、ガンのように悪性の加速化が、社会的変化に、今日の行動の公的な指針としての法的文化的政治的な慣行を否認するような速度を強いるとき、社会は破壊される」。³⁴

ところが、私たちが法的文化的政治的なミームの集積をつうじて行動をたがいに制約しあう伝統的社会——すくなくともどんなタイプの合理性に依拠して価値を選択しているかを人びとが対話によって確認できる社会——は、モノを人間集団の効用の総和を拡大すべくうごかすという作業において、市場よりも効率性に劣る。市場は「経済」を権力として意識されないレベルに自明化することで、モノをうごかす原理をシステムレベルで自律化した、このプロセスに依存して経済成長はなりたつからだ。

したがって、ホワイトヘッドの言葉をうけてハイエクが発した次の指摘は、イリイチらの批判が正当だとしても、なお解決すべき課題として私たちの眼前に残るであろう。

「社会的諸力の自生的な相互作用がときに、どんな個的精神も意識的に解きえない、おそらくは知覚さえしない問題を解くことが事実だとすれば、またそれによって、個々人の能力を高める秩序ある構造をだれに設計されたのでもなく生みだすとすれば、その作用は意識的行動よりもすぐれているのである。実際、個々人の行動とは区別され「社会的」と呼ばれるに値する社会的過程はいずれも、およそ定義によって意識的ではない。その種の過程が意識的な指導によっては生みだしえなかったはずの有益な秩序をもたらすことができるかぎり、その種の指導に服従させようとするいかなる試みも、社会的活動が達成しうることを、個的精神の劣った能力にまで制限することを意味するのである。」³⁵

私たちは上掲のイリイチとハイエクによる 2 つの言葉に挟まれて、その両方を乗り越えていかななくてはならない。イリイチ自身は、その展望を自立共生 (conviviality) という概念に託した。³⁶

³⁴ イリイチ (2015), 15 ページ。イリイチに先立つ 1 世紀前に、J. S. ミルが主旨を同じくする警告を発していたことも述べておく。この点については古山前掲論文を参照。

³⁵ ハイエク (2011), 93-94 ページ。

³⁶ イリイチの思想と処方についてはイリイチ (2015) を参照されたい。本稿ではこれ以上論点を広げることとは避けておく。

その意味では、近年地方創生という掛け声のもとに叫ばれている、現代日本において地方と都市の関係をどのようにアレンジしていくべきかという課題は、モノのうごきを人間集団にとって効率的に制御することを無意識的な至上命題としてきた近代的権力をといたおしつつ、自立共生的な生活を獲得するという課題に連なっている。経済が客観的に観察可能なシステムではなく、コシークのいう総体性であることを知った私たちは、こうした課題に対峙しながら、総体性に否応なく関与していかななくてはならないと考える。³⁷

結語

アリと私たちをつなぐものは、個々の主体がシステムへの参加局面では意識しない帰結を大域的に創発する自己組織化性である。アリも私たちも、この性質を利用して自然との物質代謝過程を集団レベルで遂行している。この帰結は、自分たちが何をしているか知らないまま、その行動を継続することでえられている。ここに経済が権力であることの本質がある。

前述したように、ミクロ経済学は自己利害にしたがう大数の家計と企業が、それぞれ市場における効用最大化行動と利潤最大化行動をつうじてパレート最適配分という財所有権の布置をもたらすことを論証した。これは、個々の市場参加者の意図をこえたレベルで創発する結果であった。さらに、ドブルーとスカーフらはこの結果が自己強化性をもつことを示した。財をパレート最適配分というルールにそくしてうごかすこのメカニズムは、個別の経済主体には意識されず、大域的なレベルで事後的に創発している点が重要だ。この意味で、現代市場経済の本質は経験的に知覚できる対象にではなく、知覚をこえた力（はたらき）のうちに存している。

他方で、私たちヒトが社会性昆虫と異なるのは、この帰結に「私たち」の意思決定がかかわっていることを知識として了解できる点に存する。知識は社会における文化子（ミーム）になり、社会の再生産様式に変化をもちこむ。こうして、社会と経済の関係は、変革の契機を内側から孕んだ総体性となる。しかし、現代ではテクノロジーの浸透のために、人間が協働してこの総体性に関与することが難しくなっている。

私たちはヒトという生物集団が到達した文明（ホワイトヘッド）の成果を享受しつつも、このアンビバレンスと対決することが必要な状況に直面しているといえよう。

文献

アリストテレス『政治学』牛田徳子訳、京都大学学術出版会、2001年。

³⁷ 本稿でその解決法を示すことはできないが、安田女子大学現代ビジネス学科では2016年3月、2017年2月と過去2度にわたり、広島県豊田郡大崎上島町で町役場・地域住民の方の協力をえて、価値探索型・発信型のセミナーを実施した。本稿の内容は筆者がこのセミナーに全面的にかかわることで触発されたことも付記しておく。

- 市野川容考『社会（思考のフロンティア）』岩波書店，2006 年。
- 木村資生『生物進化を考える』岩波新書，1988 年。
- 古山友則「経済に内因する自然科学性について」『立命館経済学』第 65 巻第 4 号，2017 年 2 月，238-256 ページ。
- アダム・スミス『国富論 国の豊かさの本質と原因についての研究（上・下）』山岡洋一訳，日本経済新聞社，2007 年。
- 田中秀夫『原点探訪 アダム・スミスの足跡』法律文化社，2002 年。
- 土屋恵一郎『怪物ベンサム』講談社学術文庫，2012 年。
- 堂目卓生『アダム・スミス 「道德感情論」と「国富論」の世界』中公新書，2008 年。
- 富永茂樹『トクヴィル 現代へのまなざし』岩波新書，2010 年。
- 中垣俊之『粘菌 その驚くべき知性』PHP 研究所，2010 年。
- 西部忠『貨幣という謎 金と日銀券とビットコイン』NHK 出版，2014 年。
- F. A. v. ハイエク『市場・知識・自由 自由主義の経済思想』田中眞晴・田中秀夫編訳，ミネルヴァ書房，1986 年。
- 藤原保信『自由主義の再検討』岩波新書，1993 年。
- N. マキアヴェッリ『君主論』池田廉訳，中央公論新社，2001 年。
- 松本忠夫「シロアリが作る巨大な巣 そのパワーの源を探る」武田計測先端知財団編『自己組織化で生まれる秩序 シロアリ・量子ドット・人間社会』2012 年，第 1 章。
- 丸山徹『アダム・スミス「国富論」を読む』岩波書店，2011 年。
- 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波文庫，2007 年。
- Arendt, H., *The Human Condition*, Walgreen Foundation Lecture, University of Chicago Press, 1958.
(アレント『人間の条件』志水速雄訳，ちくま学芸文庫，1994 年。)
- Benn, S. I., “Society”, in D. M. Borchert et al. eds., *Encyclopedia of Philosophy*, 2nd edition, Macmillan Library Reference, 2006, pp.93-97.
- Bentham, J., *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation* (Dover Philosophical Classics), Dover, 2007. (ベンサム「道德および立法の諸原理序説」『世界の名著 38 ベンサム/J. S. ミル』山下重一訳，中央公論社，1967 年。)
- Brynjolfsson, E., A. McAfee, *Race against the Machine : How the Digital Revolution is Accelerating Innovation, Driving Productivity, and Irreversibly Transforming Employment and the Economy*, Lighting Source Inc., 2011. (ブリニョルフソン・マカフィー『機械との競争』村井章子訳，日経 BP 社，2013 年。)
- Camazine, S. et. al., *Self-Organization in Biological Systems*, Princeton University Press, 2001.
(Camazine ほか『生物にとって自己組織化とは何か 群れ形成のメカニズム』松本忠夫・三中信宏訳，海遊舎，2009 年。)
- Dasgupta. P., *Economics : A Very Short Introduction*, Oxford University Press, 2007. (ダスグプタ『1 冊でわかる 経済学』植田和弘・山口臨太郎・中村裕子訳，岩波書店，2008 年。)

- Dawkins, R., *Growing up in the Universe*, The Richard Dawkins Foundation for Reason and Science, 2014. (ドーキンス『進化とは何か ドーキンス博士の特別講義』吉成真由美訳, 早川書房, 2014 年.)
- Debreu, G., *Theory of Value*, Cowles Foundations Monograph, 1959.
- Debreu, G., H. Scarf, “A Limit Theorem on the Core of an Economy”, *International Economic Review* vol. 4, 1963, pp.235-246.
- Hayke, F. A. v., *The Counter-Revolution of Science : Studies on the Abuse of Reason*, The Free Press, 1952. (ハイエク『ハイエク全集Ⅱ-3 科学による反革命』渡辺幹雄訳, 春秋社, 2011 年.)
- Ichiiishi, T., *Game Theory for Economic Analysis*, Academic Press, 1983.
- Illich, I., *Tools for Conviviality*, Harper & Row, 1973. (イリイチ『コンヴィヴィアリティのための道具』渡辺京二・渡辺梨佐訳, ちくま学芸文庫, 2015 年.)
- Kaplan, J., *Humans Need Not Apply*, Janklow & Nesbit Associates, 2015. (カプラン『人間さまお断り人工知能時代の経済と労働の手引き』安原和見訳, 三省堂, 2016 年.)
- Kelly, K., *What Technology Wants*, Penguin, 2011. (ケリー『テクニウム テクノロジーはどこへ向かうのか?』服部桂訳, みすず書房, 2014 年.)
- Kosík, K., *Die Dialektik des Konkreten : Eine Studie zur Problematik des Menschen und der Welt*, Suhrkamp, 1967. (コシーク『具体的なものの弁証法』花崎皋平訳, せりか書房, 1977 年.)
- Mill, J. S., *Utilitarianism*, 2nd edition, ed. and with introduction by G. Sher, Hackett, 2001. (originally published in 1861)
- Starr, R. M., *General Equilibrium Theory : An Introduction*, 2nd edition, Cambridge University Press, 2011.
- Tocqueville, A. de., *De la Democratie en Amerique*, Paris : Michel Levy, 1835. (トクヴィル『アメリカのデモクラシー 第一巻 (上・下)』松本礼二訳, 岩波文庫, 2005 年.)
- Veblen, T., *The Theory of the Leisure Class : An Economic Study in the Evolution of Institutions*, New York, The Macmillan Company, 1899. (ヴェブレン『有閑階級の理論 増補新訂版』高哲男訳, 講談社学術文庫, 2015 年.)

《2017.3.7 受理》

【研究ノート】

社会人基礎力とは何か

～社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」を今、振り返る～

金沢 英樹

1. はじめに

大学教育に対し、若者が実社会に出る直前の教育課程との位置付けもあって、地域社会や産業界に貢献出来る人材の育成を求められて久しい。政府機関の議論としては、経済産業省において、我が国の経済活動等を担う産業人材の確保・育成の観点から、職場等で求められる能力（「社会人基礎力」）の明確化、産学連携による育成・評価の在り方等について、2005年7月から経済産業政策局長の私的研究会「「社会人基礎力」に関する研究会」（座長：諏訪康雄法政大学大学院教授）が開催され、検討が進められた。そして2006年1月、本研究会は「社会人基礎力」の明確化、その育成・評価等のための企業、学校、政府等の取組の在り方等を内容とする「中間取りまとめ」報告書を策定して、これを公表した^{*1}。

一方2012年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（以下、「質的転換」答申）は、変化が激しく予測困難な現代において、「社会の各方面・各分野において大学改革に対する期待が高まっている」とし、その理由として「予測困難な時代において、地域社会や産業界は、今後の変化に対応するための基礎力と将来に活路を見出す原動力として、有為な人材の育成や未来を担う学術研究の発展を切望しているから」とした^{*2}。

本稿では、上述のうち「社会人基礎力」に関する研究会の「中間取りまとめ」を採り上げ、特に「社会人基礎力」が提唱された社会的背景に焦点を当てる。なぜなら、この「社会人基礎力」が提唱されてから本稿の執筆時点ですでに10年が経過したが、「社会人基礎力」の育成が提唱された時代背景は当時と何ら変わっておらず、むしろ我が国を取り巻く世界情勢は、英国のEU脱退、実業界出身のトランプ米国大統領の登場等、未曾有の混迷に入った感すらあって、今、より一層「社会人基礎力」の育成が大学教育に求められていると筆者は感じるからである。

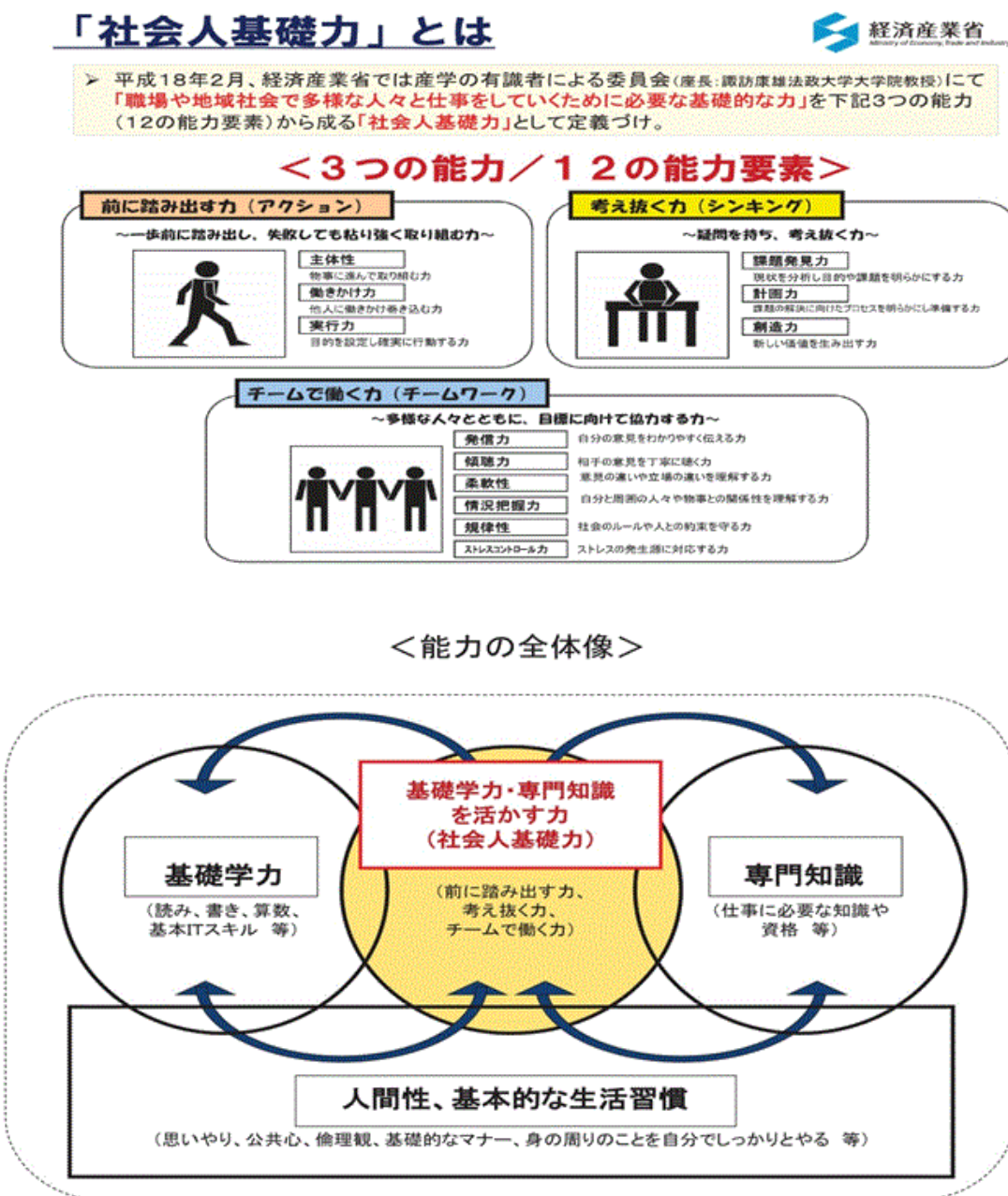
2. 社会人基礎力の定義

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力と12の能力要素から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年から提唱している概念である^{*3}。

3つの能力を構成する12の能力要素とは、「主体性」「働きかけ力」「実行力」（以上が「前に踏み出す力」を構成する）、「課題発見力」「計画力」「創造力」（以上が「考え抜く力」を構成する）、「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」（以上が「チームで働く力」を構成する）^{*4}である。

また、社会で働くためには、読み書き・計算・IT スキルなどの「基礎学力」や、仕事に必要な知識・技能などの「専門知識」が必要であり、さらに「社会生活を送るための責任感や思いやり、公共心、倫理観、基本的なマナー、一般常識・教養などの「人間性・基本的な生活習慣」が全ての活動の基盤となる。「社会人基礎力」はこれらの他の要素と重なり合う部分を持ち、さまざまな経験を通して相互に作用しながら、共に成長していくものとされている^{*5}。

図 1：「社会人基礎力」概念図（経済産業省公表資料）



この概念が生まれた背景については次項に譲るが、その検討の経緯の中で注目されたのは、若年層に不足が見られる「仕事の現場で求められている能力」であり*6、結果的に社会人基礎力の定義では「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」と整理されている*7*8*9。

3. 背景 ―社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」を振り返る―

「中間取りまとめ」は4つの章からなる本文と参考資料から構成されている。

図2：「中間取りまとめ」目次

目次	
はじめに	… P 1
I. <u>職場や地域社会で求められる能力</u>	… P 2
1. ビジネス・教育を巡る環境変化	
2. 職場等で求められる能力の明確化	
3. 取り組むべき課題	
II. <u>社会人基礎力の内容</u>	… P12
1. 社会人基礎力の具体的な内容	
2. 社会人基礎力により実現されるメリット	
3. 社会人基礎力の位置付け	
III. <u>社会人基礎力を土台とした企業・若者・学校の「つながり」</u>	… P19
1. 関係者の「つながり」を巡る状況	
2. 関係者の連携の強化に向けて	
IV. <u>どのような取組が求められるか？</u>	… P24
1. 産業界・企業に臨まれる取組	
2. 若者に望まれる取組	
3. 教育機関に望まれる取組	
4. 家庭・地域社会に望まれる取組	
5. 政府に求められる取組	

「中間取りまとめ」では冒頭に、「社会に出るとき多くの若者は職場や地域社会で思うような活躍をし、豊かで充実した人生を送りたいと願っている」とし、「その実現のためには「職場や地域社会で求められる能力」を適切に身につけることが必要となる」*10と述べて、後に整理される「社会人基礎力」の概念をまず「職場や地域社会で求められる能力」として頭出ししている。

ところで、ここに述べられている若者の願いや、それを成就するために必要とされる能力があるという考え方自体は何ら目新しいものではない。しかし「中間取りまとめ」が持つ問題意識は「そうした能力を若者が従前のように身につけることが出来なくなっているのではないか」、さらに言えば「従来、日本の人材育成を支えていた枠組みが必ずしも有効に機能しなくなってきたのではないか」*11というところにある。その理由をまず、90年代以降に生じた、若者を取り巻く環境変化に求めている。

この「90年代以降の環境変化」について、「中間取りまとめ」では2点を指摘している。一つはビジネス環境の変化であり、もう一つは教育を巡る環境変化である。

（１）「社会人基礎力」が求められるようになった背景①「ビジネスを巡る環境変化」

ビジネス環境の変化については、特に「国内市場の成熟化」と「IT化の進展」を挙げ、前者は「市場ニーズの多様化や商品サイクルの短期化をもたらした」と指摘し、また後者は「職場の単純な作業を機械化することを可能としている」と述べている。そしてこれらの変化から、現代においてビジネスパーソンに求められる能力を示唆するがごとく、「今まで以上に「新しい価値のある商品やサービスをいかにして創るか」が重要な課題として意識されてきている」と述べる*12。

この課題、すなわち「新しい価値の創出」のために必要な能力、言い換えれば現代のビジネスパーソンに重要な能力として、「中間取りまとめ」は「人との接触の中で仕事に取り組む能力」を重要視する。「新しい価値の創出」は、多様な人材との接触の中で生まれるとの認識が背景にある。そして「社会の中で人と触れ合うことを前提としている」能力を「社会人基礎力」と名付けることが適当である」と言い切る*13。ここで感じるのは、「社会人基礎力」には多様な能力と能力要素が提示されているが、「中間取りまとめ」が最も重要視しているものは、ビジネス環境の変化から一層重要視されるべきとする「人との接触の中で仕事に取り組む能力」、すなわち簡潔に言えば「チームで働く力」ということである*14。

（２）「社会人基礎力」が求められるようになった背景②「教育を巡る環境変化」

教育を巡る環境変化については、「家庭や地域社会の教育力の低下」と「大学進学率の上昇」が挙げられている。ここでは「家庭や地域社会の教育力の低下」に触れる。

「家庭や地域社会の教育力の低下」については、特に家庭に関し「子ども・親・兄弟、祖父母、近隣の人と触れ合う機会の不足が教育力低下の理由として指摘されている」と述べる*15。そしてこれを原因として、子どもは大人になるプロセスで、職場で求められる「人との接触の中で仕事に取り組む能力」を家庭や地域社会の中で「自然に」身に付けることが出来

なくなってきたことを示唆する*16。その結果として、若者の「社会の中で人と触れ合うことを前提としている能力」すなわち「社会人基礎力」の水準については、少なくとも個人間のばらつきが拡大する方向にあると分析している*17。

すでに述べたように、この「中間取りまとめ」では「人との接触の中で仕事に取り組む能力」を重要視している。こうした能力の必要性の増大、一方で若者がそれを身につけることが出来なくなっている状況について、「中間取りまとめ」は、国際的な人材育成における競争が高まっている事実に触れ、従前より我が国の強みとして高い評価が与えられている「チームワーク」の後退の可能性をも危惧していることがうかがえる*18。

4. 「社会人基礎力」の位置付け

(1) 「社会人基礎力」育成の意義

すでに述べてきた状況変化を克服するために、我々はどうすべきか。「中間取りまとめ」はその手がかりとして、「人との接触の中で仕事に取り組む能力」は従来、我々が家庭や地域社会の中で「自然に」身に付けてきたものであり、またそれだけに、我々自身、この能力の具体的な定義や育成のための方法等についてあまり明確にしてこなかったとする*19。

しかし内外の変化が生じ、家庭や地域社会が若者にこうした能力、すなわち「社会人基礎力」を教育する機能が失われてきているのであれば、「個人のみならず、社会全体による対応を早急に実施していくことの必要性が高まっている」*20と警鐘を鳴らす。さらに進めて、「内外の変化の下、従来以上に社会人基礎力の育成の土台を強化することが必要となっており、そのための「社会全体による新たな枠組みづくり」が早急に取り組まれるべき課題となっている」*21として、「社会人基礎力」の育成を社会全体として取り組む意義を提起している。

(2) 「共通言語」としての「社会人基礎力」

こうして「社会人基礎力」の育成を社会的な課題として認識し、関係者が努力していくとなれば、その「社会人基礎力」とはいかなるものであるのか、具体的な内容を整理して関係者に共有を図ることが重要となる。「中間取りまとめ」では、「今こそ社会人基礎力を企業・若者・学校等をつなぐ「共通言語」として明確に位置付け、これら関係者の連携を強化することを通じ、長期的な視点から社会人基礎力を育成していく新たな社会的枠組みを形成していくことが必要となっていると考えられる」*22と表現されている。

その「共通言語」としての「社会人基礎力」の内容は、第Ⅱ章「社会人基礎力の内容」に整理されている（表1：「社会人基礎力の能力要素」）*23。

表 1：「社会人基礎力の能力要素」

分 類	能力要素	内 容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力 例) 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例) 「やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく。
	実行力	目的を設定し確実に行動する力 例) 言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的な課題を明らかにする力 例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、それに向けた準備をする。
	創造力	新しい価値を生み出す力 例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例) 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらうように的確に伝える。
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 例) 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事の関係性を理解する力 例) チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力 例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例) ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

(3)「社会人基礎力」の位置付け

「中間取りまとめ」では、「社会人基礎力」が関係者による継続的な育成の取組みとして、また若者が自らに対する「気付き」を得るための枠組みとして、有効に活用されるための5つの留意点を挙げている。すなわち、「育成・評価が可能な能力であること」「自己の強みを伸ばしアピールするための土台であること」「各成長段階を通じて一貫した育成が必要であること」「学校教育の中で育成が可能であること」「家庭・地域社会による取組が可能であること」である^{*24}。

5. 関係者間の連携の必要性和そのあり方

「中間取りまとめ」の第Ⅲ章・第Ⅳ章では、企業・若者・学校等の関係者の現状、及び関係者間の「社会人基礎力」の育成を巡る現状を分析した後、「必ずしも社会人基礎力を土台とした（関係者間の）連携が十分に行われているとは言えない状況」^{*25}であるという認識のもとに、関係者の連携の強化に向けて望まれる取組みを提起している。本稿では紙幅の都合上、その詳細については割愛する。

6. 考察

以上、「社会人基礎力」が提唱された社会的背景を中心に「中間取りまとめ」を概観した。冒頭に記したように、現在は「中間取りまとめ」当時以上に、若者に対し「社会人基礎力」を求めざるを得ない状況にあると思われる。大学教育に対しては、社会に貢献する人材の育成に向けて、その充実をより一層図ることが求められているように思える。

例えば「中間取りまとめ」においては、社会人基礎力を土台とした企業・若者・学校の連携の必要性を強調した上で、大学は社会人基礎力の観点から、正課の授業において、例えば学生のグループワークを行うなど、取組の工夫を行うことが有効であると述べられている^{*26}。

さらに、中央教育審議会「質的転換」答申は学士課程教育の質的転換について、「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」^{*27}として、学士課程における学修について、従来の受動的な学修から能動的な学修への転換を求めている。

いずれも、受動的ではなく能動的に生きることが求められる実社会に将来巣立っていく大学生に対して必要な教育、という観点においては同じ視点からの提言であるように感じる。しかし実際の大学教育現場はいかなる様相であるのか。

大学教育の現場にいる者として、その実態は「質的転換」答申が指摘する従来の受動的学修が依然として大宗を占める状況のように思える。すなわち、本稿の論旨に沿って言い換えれば、「社会人基礎力」育成のための能動的学修への転換は、未だ進んでいないように見える。

その理由はいくつかあるように思える。第一に、大学教員にとって、こうした社会的要請

を意識しつつも、現実的には社会人基礎力が向上する能動的学修プログラム、例えば「中間取りまとめ」が関係者の連携をもとに意識している何らかの産学共同プロジェクトを設計することは容易なことではない*28。そして、その学修プログラム展開において教員は、変化する状況に対し柔軟な指導を行い、学生を適切な道に導いていかねばならない。そのことはすなわち、教員自身の学術的知見あるいは社会的経験を厳しく問うことになる。「質的転換」答申の言う、「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創」る*29 ことは理想的に見えるが、教員は学生への教育に関して一定の責任を負う以上、学生と同じ立場ではなく、学生の成長に資する方向性を見出し、学生に示していく責務がある。しかし「社会人基礎力」が「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」であり、その育成のために取り組む課題が実社会同様の多様な変化を含み、その対応に係る応用力が問われれば問われるほど、教員にとってその責務を全うすることの難易度が上がる。それを思うばかりに、教員は取り組みの着手に消極的になる。このことが、「社会人基礎力」育成のための能動的学修への転換があまり進まない理由の一つであるように思われる。

第二に、学生の「社会人基礎力」の向上をどのように測定するか、という問題がある。「中間取りまとめ」では、「社会人基礎力は、職場や地域社会で求められる能力として意識的な育成や評価が可能な能力」とであると説明されている*29。さらに経済産業省では2007年度に、大学で学んだ専門知識を活用して企業等から与えられた実課題をチームで解決していく、PBLや実践型インターンシップ等の「実践型学習」を通じて、実際に社会人基礎力の育成・評価を行うモデル事業を7大学にて実施している*30。社会人基礎力の評価手法についてはこの7大学におけるモデル事業を含め、すでに様々な取組事例が発表・公刊されているが、それでもこうした評価は学生自身あるいは指導教員等、当事者の主観的なものであることがどうしても否めないように思える。学生や教員が、学修プログラムの開始及び終了後に評価を行い、その結果当該学生の社会人基礎力が向上したと評価されても、当事者以外の他者、特に「社会人基礎力」の定義にある職場や地域社会等にその能力が正当に評価されるのか、筆者には未だ疑問が残る*31。こうして、教員が試行錯誤しようやく学修プログラムを終えた後に、その目的である学生の「社会人基礎力」向上に関する成果獲得について教員が確信を持ちきれないのも、「社会人基礎力」育成のための能動的学修への転換があまり進まない理由の一つであるように思われる*32。

7. おわりに

いずれにしても時代は学生に「社会人基礎力」の一層の向上を求めている。そうである以上、「社会人基礎力」の向上に資する教育を進めていくためには、今、何が必要なのか、教員に何が出来るのかを突き詰めていかねばならない。一歩進めていくためにはまず、「社会人基礎力」向上のための学修プログラムに取り組もうとする教員の道標として、さらなる先行・先進事例が報告され、成功要因以上に失敗要因・不具合あるいは困難なハードルが明らかにされる必要があろう。報告を受け止める教員として、その困難さに戸惑うこともあろう

が、そのプログラムに果敢に取り組み実行した、教育者としての教員が存在する事実は同業の教員にとって重い。加えて期待したいのは、その学修プログラムに取り組む学生がいかに悩み戸惑ったか、さらに、いかにして解決策を見出し課題を乗り越えていったか等、学生の取り組み実態が明らかにされればなお教員は勇気づけられるように思われる。

しかし何より、考えているより先に自ら、まず思いつくアイデアを実行してみることが大切であろう。我々現場の教員においては、一層の事例蓄積により経験値を高め、他の教員と共有し、学生の成長のために、学生の教育に当たる教員が一丸となって取り組むという理想を追い続けていくことが重要であるに違いない。社会に巣立つ直前の、学生の人生における大切な時期を預かる教員として。

[注]

- *1 斎藤寧「社会人基礎力」の展開 ―大学での展開への若干の提言」、比治山大学短期大学部紀要第43号、2008年、43頁。
- *2 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」2012年8月、1頁。
- *3 経済産業省ホームページ。
- *4 同上。
- *5 経済産業省編著「社会人基礎力 育成の手引き ―日本の将来を託す若者を育てるために」(河合塾製作・調査)、河合塾(発売元 朝日新聞出版)、2010年、3頁。
- *6 同上、2頁。
- *7 同上、2頁。
- *8 筆者には企業勤務経験があり、長く新卒採用の過程に関わった。採用の場面で企業は学生の持っている能力を見極めようとするが、その能力とはまさにこの「社会人基礎力」に包含されるものであると実感する。大学教育現場において社会人基礎力の向上に努めることこそが、企業勤務経験のある教員としての任務であると認識している。
- *9 筆者の勤務先の学生が卒業後多数入社している企業において、人材育成に豊富な経験を持つあるマネージャーは筆者に対し「あくまで『基礎力』レベルを付けて、社会人の世界へ入ってもらえると、新卒にとっては、より多くのことが、より早い時間で学べ、吸収でき、早期離職の防止、会社にとっては、結果的に人材育成の生産性向上に繋がると思います」と証言している。
- *10 社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」(以降、「中間取りまとめ」)、経済産業省 社会人基礎力に関する研究会、2006年、2頁。
- *11 同上、8頁。
- *12 同上、2頁。
- *13 同上、4頁。
- *14 この認識はまさに正しい。筆者の企業勤務経験を踏まえると、企業には個人では到底克服出来ないような難易度の高い課題が発生する。しかし多数の社員の英知を結集し協働することによって克服が可能となるのであり、それこそ企業発展の原動力であると信じる。
- *15 「中間取りまとめ」、2頁。
- *16 同上、3-4頁。
- *17 同上、5-6頁。
- *18 同上、8頁。
- *19 同上、3-4頁。
- *20 同上、7頁。
- *21 同上、8頁。
- *22 同上、9頁。

- *23 同上、14 頁。
- *24 同上、16-17 頁。
- *25 同上、19 頁。
- *26 同上、26 頁。
- *27 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」、2012 年 8 月（以下、「質的転換」答申）、9 頁。
- *28 教育プログラム設計の手法の提示、あるいは先進事例により教員を支援すべく、経済産業省編著「今日から始める社会人基礎力の育成と評価 ～将来の日本を支える若者があふれ出す！」角川グループパブリッシング、2008 年、経済産業省編著「社会人基礎力 育成の手引き ―日本の将来を託す若者を育てるために」(河合塾製作・調査)、河合塾（発売元 朝日新聞出版）、2010 年、等が公刊されている。
- *29 「中間取りまとめ」、16 頁。
- *30 経済産業省編著「今日から始める社会人基礎力の育成と評価 ～将来の日本を支える若者があふれ出す！」角川グループパブリッシング、2008 年、2 頁。この 7 大学の取組み、及び社会人基礎力の評価手法については、本書の I 章（II）評価手法、及び 2 章に詳しい。
- *31 というのも、筆者は毎年、社会人基礎力協議会・経済産業省共催「社会人基礎力育成グランプリ」を観覧しているが、同グランプリにおける各大学の発表事例及び当該学生の社会人基礎力の向上度合につき、審査員、また観覧する教員によってその評価が異なることを感じているからである。
- *32 しかし教育の成果とは元来、直ちに明確な形で学生から表出するものではないのかも知れない。とすれば、「社会人基礎力」育成に関する学修も同じであって、教員はそのプログラムを実行することでその成果、並びに学生自身を信じるより他にないのかも知れない。

[参考文献等]

経済産業省ホームページ

経済産業省編著「今日から始める社会人基礎力の育成と評価 ～将来の日本を支える若者があふれ出す！」角川グループパブリッシング、2008 年

経済産業省編著「社会人基礎力 育成の手引き ―日本の将来を託す若者を育てるために」(河合塾製作・調査)、河合塾（発売元 朝日新聞出版）、2010 年

斎藤寧「「社会人基礎力」の展開 ―大学での展開への若干の提言」、比治山大学短期大学部紀要第 43 号、2008 年

中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」、2012 年 8 月

《2016.12.18 受理》

12 期生卒業論文題目一覧 (2016 年 3 月卒業)

論文指導：青木克仁

2013.3.25	佐藤	真由香	オーストラリアは水危機にどう対処するのか
2013.3.25	中野	真由	親子間における真実の愛について
2013.3.25	佐藤	中野	なぜ人は他者から認められることを望むのか
2013.3.27	佐藤	山崎	私たちを取り巻く恋愛と依存
2013.3.27	佐藤	山崎	デート DV は愛情表現といえるのか
2013.3.28	佐藤	山崎	夢分析でわかる人間の深層心理
2013.3.28	佐藤	山崎	なぜ怒りの感情があるのか
2013.3.28	佐藤	山崎	日本における若年層の自殺率の高さと その原因についての考察
2013.3.28	中野	真由	メディアにおけるジェンダー問題
2013.3.27	二宮	山崎	自己認識に関する日米比較
2013.3.28	佐藤	山崎	「笑う」ということと「泣く」ということの 表情や行動が生活していく中でもたらず力とは何なのか
2013.3.28	佐藤	山崎	非言語コミュニケーションについて
2013.3.28	中野	山崎	風俗が職業として認められる日はくるのか
2013.3.28	佐藤	山崎	外国語としての日本語について
2013.3.28	中野	真由	人間の不合理な考え方と行動について

論文指導：Joy Jarman-Walsh

2013.3.28	佐藤	山崎	Anime and Manga Business Effect on Tourism
-----------	----	----	--

論文指導：染岡 慎一

2013.3.28	佐藤	山崎	女子学生における商品情報の取得について
2013.3.28	佐藤	山崎	SNS を使用した情報拡散の研究
2013.3.28	佐藤	山崎	女子大生の映画に関する意識調査
2013.3.28	佐藤	山崎	若者の車離れについて

論文指導：埴本 一雄

2013.3.28	佐藤	山崎	The implications for Japan on the inception of the Gap Year System
2013.3.28	佐藤	山崎	無印良品の経営戦略
2013.3.28	佐藤	山崎	IBM 社の再生戦略分析—組織文化の変革に焦点を当てて—
2013.3.28	佐藤	山崎	日本女性の働き方と生き方

2021.03.26	中島 聡	ディズニーランドの経営戦略
2021.03.27	中島 聡	カープ女子とサンフレ女子
2021.03.28	中島 聡	ディズニーのキャラクター戦略
2021.03.29	中島 聡	広島観光経営戦略論
2021.03.30	中島 聡	日本の教育と福祉とのかかわり方
2021.03.31	中島 聡	ドトールコーヒーとスターバックスコーヒーの 経営戦略の違い
2021.04.01	中島 聡	コンビニエンスストアにおけるコラボ商品の展開
2021.04.02	中島 聡	スターバックスの経営戦略
2021.04.03	中島 聡	和菓子のマーケティング戦略
2021.04.04	中島 聡	マーケティングからみた「アナと雪の女王」
2021.04.05	中島 聡	ゆるキャラの成功要因
2021.04.06	中島 聡	日本人から消えないスタジオジブリ

論文指導：田村 聡一郎

2021.03.26	中島 聡	SNS が関係する犯罪についての調査研究
2021.03.27	中島 聡	情報化社会における手書き文字に関する調査
2021.03.28	中島 聡	企業の人材育成制度についての調査・研究
2021.03.29	中島 聡	プライベートブランドに関する調査研究
2021.03.30	中島 聡	電子書籍の普及による書店業界の影響
2021.03.31	中島 聡	Visual Basic とデータベースを用いた 売上管理システムの作成
2021.04.01	中島 聡	テーマパークの魅力
2021.04.02	中島 聡	zoom-zoom スタジアムにおける経営戦略について
2021.04.03	中島 聡	自動車活用に関する調査研究
2021.04.04	中島 聡	web 上のトラブルに関する研究
2021.04.05	中島 聡	女性の色活用について
2021.04.06	中島 聡	ディズニーランドにおけるホスピタリティに関する調査
2021.04.07	中島 聡	和食の経済効果について

論文指導：戸井 佳奈子

2021.03.26	中島 聡	マツダの復活と今後
2021.03.27	中島 聡	USJ の経営戦略について
2021.03.28	中島 聡	なぜ日本において株式投資が求められているのか
2021.03.29	中島 聡	日本のアニメ産業のこれから
2021.03.30	中島 聡	ブライダル業界の現状と課題

2013.03.28	田中 孝	ゆとり世代に対する人材育成
2013.03.29	田中 孝	地方公共交通機関のあり方について
2013.03.30	田 原 孝	日本郵政のこれから
2013.03.31	中山 隆雄	広島東洋カープの経営の秘訣～地元で愛される球団～
2013.04.01	堀 雄子	広島のインバウンド政策の現状と課題
2013.04.02	田中 孝	日本映画産業の現状と展望
2013.04.03	内田 真由	インバウンドマーケティングは マーケティングの主流になるのか
2013.04.04	田中 孝	ゴディバのブランド力について
2013.04.05	田中 孝	外食産業の現状と今後

論文指導：西村 則久

2013.04.06	田中 孝	Visual Basic を使った倉庫番パズルの制作
------------	------	----------------------------

論文指導：野村 康則

2013.04.07	内田 真由	女性が社会で働くにあたっての課題と展望
2013.04.08	田中 孝	女性のワークライフバランスー女性が輝く日本へー
2013.04.09	堀 雄子	空き家が抱える問題と活用方法について
2013.04.10	田中 孝	広島市安佐南区の地域活性化と高齢者
2013.04.11	中山 隆雄	結婚・出産後の女性の労働
2013.04.12	内田 真由	企業で生きる女性
2013.04.13	田中 孝	働く女性とそのキャリアデザイン
2013.04.14	上田 隆子	東京ディズニーリゾートの経営戦略
2013.04.15	大上 真由美	化粧品業におけるマーケティング戦略
2013.04.16	田中 孝	広島県の観光産業について
2013.04.17	田中 孝	少子高齢化地域における活性化
2013.04.18	大上 真由美	ファーストフード業界のマーケティング
2013.04.19	田中 孝	“食”における地産地消とその経済効果 ～広島市に与えるものとは～

論文指導：畑井 淳一

2013.04.20	田中 孝	クールジャパンのこれから
2013.04.21	田中 孝	日本人が外国人に憧れを持つ理由
2013.04.22	大上 真由美	時代とともに変化する青年像
2013.04.23	田中 孝	日本語と英語のオノマトペについて
2013.04.24	田中 孝	世界に広がる Kawaii 文化

12011004	西村 真樹	負の遺産と新しい広島ツーリズム
12011002	福岡 孝浩	アジア諸国と比較した日本の英語教育
12011003	福岡 隆	日本人のコミュニケーションとグローバル化
12011004	山内 孝子	広島での平和学習が観光にどうかかわっていくか
12011001	西村 真樹	今、なぜ若者は海外に行きたがるのか
12011007	山下 友理	Red Bull がなぜ Energy drink のシェア No.1 を獲得できたか
12011008	山内 孝子	English education in Japan needs more communication practice
12011006	山内 孝子	日本のおもてなしの歴史と今後

論文指導：森岡 文泉

12011005	福岡 真樹	中国経済の変遷と今後の行方
12011006	小西 彩穂	日本経済の現状と今後の課題
12011007	福岡 孝子	日中少子高齢化問題
12011009	小西 彩穂	女性が働くこと
12011010	福岡 真樹	中国の経済発展と日本
12011011	福岡 真樹	日本経済の発展と環境問題の取り組み
12011012	山内 孝子	アベノミクスの経済効果と課題
12011013	福岡 孝子	BOP ビジネスと貧困
12011014	山下 友理	TPP が及ぼす日本への影響
12011015	中国 志摩	日中韓の国民性の比較とマーケティング戦略の特徴
12011016	西村 真樹	USJ が人気を取り戻した経営戦略
12011017	福岡 真樹	スターバックスの経営戦略について
12011018	福岡 真樹	外国人観光客に対するディズニーの戦略
12011019	山下 友理	ネット販売の経営戦略と課題

論文指導：八城 年伸

12011020	福岡 真樹	日本の飲酒文化について-現代の飲酒傾向-
12011021	小西 彩穂	航空業界の「2030 年問題」 ～女性パイロットに焦点を当てて～
12011022	福岡 孝子	ネットを通じて広がるキャラ弁
12011023	山内 孝子	女性の社会進出と生き方について
12011024	福岡 真樹	限界集落の再生・活性化について
12011025	山内 孝子	劇場の生き残り戦略について
12011026	小西 彩穂	IT で変えるマツダスタジアム
12011027	山内 孝子	就職活動時期がもたらす問題について

2013.3.20	小野 博	広島東洋カープ球団の経営戦略について
2013.3.20	佐藤 寛	SNS を利用することにより発生するメリット・デメリット
2013.3.20	中野 孝	共学と女子大の女子大生の意識の違いについて
2013.3.20	佐 良子	循環型社会の発展について
2013.3.20	藤田 隆	IT で変えるマツダスタジアム
2013.3.20	小野 博	セルフフォトと SNS

論文指導：山下 明博

2013.3.20	佐藤 寛	3D プリンターが業界と私たちの生活に与える影響に関する研究
2013.3.21	佐藤 寛	鞆の浦の街並みの再現に関する研究
2013.3.24	小野 博	3次元 CG による「どうぶつの森」再現の研究
2013.3.24	佐藤 寛	3D 技術の現状と未来
2013.3.24	佐藤 寛	Metasequoia を用いた 3D モデル制作
2013.3.24	佐 良子	3D プリンターによる家屋の再現模型
2013.3.27	山下 明博	三次元 CG による映画風景の再現に関する研究
2013.3.24	佐藤 寛	現代アートの 3D プリンターによる再現に関する研究
2013.3.22	佐藤 寛	布プリンターによる洋服の制作過程に関する研究
2013.3.24	佐 良子	映像編集効果の違いによる視聴者の反応に関する研究

13 期生卒業論文題目一覧 (2017 年 3 月卒業)

論文指導：染岡 慎一

13期生卒業論文題目一覧	染岡 慎一	テレビ離れについて
13期生卒業論文題目一覧	染岡 慎一	食生活と健康
13期生卒業論文題目一覧	染岡 慎一	SNS のトラブルについて

論文指導：埴本 一雄

13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	ゆとり世代の課題とこれから
13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	JT のグローバル戦略
13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	J リーグの観戦者実態と課題
13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	最低所得保障制度がもたらす労働の変革
13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	ソーシャルメディアによる音楽ビジネスの戦略と課題
13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	製菓業界のパッケージにおける販売促進戦略
13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	日本における韓国製品のネットショッピングの経営戦略
13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	女性が活躍する企業として、資生堂が選ばれた理由
13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	ピクサーがディズニー作品に与えた戦略的付加価値
13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	ディズニーのブランド戦略からみたウェディング
13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	JINS の成功要因
13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	書店の経営戦略
13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	広島地区における路線バスの経営戦略
13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	電子マネーの現状と今後について
13期生卒業論文題目一覧	埴本 一雄	廿日市市の観光経営戦略

論文指導：立花 知香

13期生卒業論文題目一覧	立花 知香	食育が及ぼす子供たちの健康への影響、その現状と課題
13期生卒業論文題目一覧	立花 知香	J-POP がもたらす経済効果 ～エポックメイキングとしての宇多田ヒカルの事例研究～
13期生卒業論文題目一覧	立花 知香	対人場面における非言語表現媒体としてのメイクの効果
13期生卒業論文題目一覧	立花 知香	ゲームが子供に与える影響 一親と子の世代間の比較一
13期生卒業論文題目一覧	立花 知香	スニーカーの販売戦略と女子大学生の購買動向に 関する研究
13期生卒業論文題目一覧	立花 知香	生徒の学習意欲と教員の非言語表現に関する一考察
13期生卒業論文題目一覧	立花 知香	企業コマーシャルに影響される女子大学生のファン心理 一広島東洋カープ球団の事例一

論文指導：田村 聡一郎

100000001	田村	聡一郎	What does the speech of Jose Mujika do for Japanese people?
100000002	田村	聡一郎	IKEA の現状とこれから
100000003	田村	聡一郎	映画の現状と今後の可能性について
100000004	田村	聡一郎	女性の社会進出
100000005	田村	聡一郎	ブライダル業界の現状と展望
100000006	田村	聡一郎	マイナンバー制度について
100000007	田村	聡一郎	結婚の社会学
100000008	田村	聡一郎	オリエンテーションセミナーの現状と今後
100000009	田村	聡一郎	島根県の過疎化について
100000010	田村	聡一郎	なぜ日本人はハワイ旅行に憧れるのか

論文指導：辻 秀典

100000011	辻	秀典	SNS 上の人間関係 ―ネットコミュニケーションの現状―
100000012	辻	秀典	ウェディングの経営戦略
			―ゲストハウスとホテルウェディングとの比較―
100000013	辻	秀典	日本の観光戦略とこれからの展望
100000014	辻	秀典	働きやすい企業の条件：ディーセント・ワークの探究
100000015	辻	秀典	愛はなぜ終わるのか ―結婚・不倫・離婚の自然―
100000016	辻	秀典	マクドナルドの再生戦略
100000017	辻	秀典	消費者心理に及ぼすカラーの効果
100000018	辻	秀典	機内サービスとおもてなし ～日本と外国の比較～
100000019	辻	秀典	日本人女性と海外女性の働き方
100000020	辻	秀典	美人像の歴史的変遷
100000021	辻	秀典	ポケットモンスターの社会的影響力
100000022	辻	秀典	非婚・晩婚化社会の経済
100000023	辻	秀典	現代社会とペットロス
100000024	辻	秀典	日本企業の広告戦略
100000025	辻	秀典	ワークライフバランスの研究 ～女性が働き続けるために～

論文指導：仁井 和彦

100000026	仁井	和彦	少子高齢化社会における介護の在り方
100000027	仁井	和彦	神楽が地域活性化に及ぼす影響
100000028	仁井	和彦	平和がもたらす地域活性化
100000029	仁井	和彦	広島東洋カープの経営戦略 ～カープがもたらす経済効果～
100000030	仁井	和彦	TPP が及ぼす日本経済の影響 ～地域金融機関の視点から～

10011007	鶴田 明子	人口減少における地域復興戦略 一東広島市を中心として一
10011008	正岡 伸	フェアトレードによるマーケティング戦略
10011009	長瀬 美智子	外国人労働者の雇用と課題
10011010	内藤 真由	道の駅から観る広島の過疎化地域の現状
10011011	内野 麗子	少子高齢化とペット
10011012	岡野 恵太郎	日本におけるディズニーの経済効果
10011013	長岡 美智子	電子書籍と書店の経営戦略
10011014	佐々木 智恵	人口減少下における地域金融機関の経営戦略
10011015	岡田 明子	少子高齢化における地域活性化策 ～鳥取県～
10011016	岡田 明子	組織とリーダーシップ ～現代社会におけるリーダー像～

論文指導：西村 則久

10011017	岡田 明子	Visual Basic を使用したブロック反転パズルゲームの制作
10011018	岡田 明子	Visual Basic を使用した障害物迷路の制作

論文指導：野村 康則

10011019	岡田 明子	小企業・中企業における事業承継問題
10011020	内藤 真由	女子大学生の管理職意識
10011021	西上 真由	ユニクロの経営戦略について
10011022	高橋 千恵	伊勢丹新宿本店が愛され続ける理由
10011023	岡田 明子	消費税と社会保障制度の関係について
10011024	岡田 明子	グローバル社会で働く上で必要な力とは？
10011025	岡田 明子	女性が働く社会について
10011026	岡田 明子	日本の幸福度は何故低いのか
10011027	岡田 明子	日本女性の働き方
10011028	岡田 明子	株式市場と日本経済の関係 一海外経済が 日本経済に及ぼす影響をニュースを用いて読み解く一
10011029	岡田 明子	酒税法の品目判定について
10011030	岡田 明子	ユニバーサル・スタジオ・ジャパンと 東京ディズニーリゾートの比較
10011031	岡田 明子	訪日外国人観光について
10011032	岡田 明子	サンフレッチェ広島の観客動員数についての研究

論文指導：森岡 文泉

10011033	岡田 明子	中国の経済発展と日本
10011034	岡田 明子	中国人の消費志向の変化

10010103	鶴野 真知子	日本のサブカルチャーが世界経済に及ぼす影響
10010106	内本 正典	岐路にたつ中国の実態
10010108	松本 浩典	日本のアニメ文化とビジネス
10010109	大島 康徳	生き残りをかけたコンビニエンスストアの戦略
10010109	馬子 翠	アジアのインフラビジネスについて
10010114	南谷 康徳	爆買いに対する日本の商品戦略
10010118	山手 麗子	インバウンドがもたらす日本経済への影響
10010121	大島 康徳	日本の貧富格差の現状と今後の行方
10010128	山下 彰	ニューヨークと女性の働き方
10010129	原田 孝昭	SNS 業界の実態とマーケティング戦略
10010131	中島 龍典	日本と ASEAN の経済関係
10010137	藤田 敏彦	マツダの技術と経営戦略
10010154	佐々 智彦	海外から見た日本について

論文指導：八城 年伸

10010161	大島 康徳	Should we have to reform Japanese English education?
10010164	伊藤 智博	Do Japanese people need to be more extroverted for the future?
10010171	中島龍典 昭	SNS 広告
10010181	鶴野 真知子	放送業界の生き残り戦略 ～ラジオに焦点をあてて～
10010183	大島 康徳	水族館の集客戦略について
10010194	佐藤 康良	東京ディズニーリゾートの経営戦略
10010196	戸田 昌典	無料ゲームアプリケーションとの付き合い方
10010198	中島 康典	発展し続ける SNS と増え続けるネット犯罪について
10010201	藤田 敏彦	100 円ショップの経営戦略
10010202	佐藤 康良	お酒の文化的側面について
10010203	馬子 翠	USJ の経営戦略
10010204	藤田 敏彦	SNS は出版を代替できるか
10010206	原田 孝昭	空港の将来のあり方について 一 副次機能に焦点を当てて
10010209	馬子 翠	IT を用いたインバウンドビジネスについて
10010214	藤田 敏彦	ICT 教育のメリット・デメリット
10010217	原田 孝昭	ベンチャービジネスの現状と課題
10010222	藤田 敏彦	広島東洋カープにみるグッズの販売促進戦略
10010228	山下 彰	ミニマリストによる経済効果

論文指導：山下 明博

文部科学省 文化庁 芸術振興課

コンピュータグラフィックスによる

美術作品の仮想現実化についての研究

文部科学省 文化庁 芸術振興課

快適な空間の造形に関する研究

文部科学省 文化庁 芸術振興課

仮想家屋の造形に関する研究

文部科学省 文化庁 芸術振興課

仮想空間の CG による表現の研究

文部科学省 文化庁 芸術振興課

日本人の幸せについての研究

文部科学省 文化庁 芸術振興課

3D プリンターによるグランドピアノ制作

文部科学省 文化庁 芸術振興課

3 次元 CG による架空建造物の表現に関する研究

文部科学省 文化庁 芸術振興課

人間の模型制作に関する研究

文部科学省 文化庁 芸術振興課

日本におけるパブリックアートに関する研究

執筆者紹介(50 音順)

金沢英樹 安田女子大学現代ビジネス学部現代ビジネス学科准教授

古山友則 安田女子大学現代ビジネス学部現代ビジネス学科講師

水谷昌義 安田女子大学現代ビジネス学部現代ビジネス学科教授

2016 年度 安田女子大学現代ビジネス学会誌 第 5 号

2017 年 3 月 31 日発行

発行者 安田女子大学現代ビジネス学会

731-0153 広島市安佐南区安東 6-13-1

代表人 辻 秀典

編集人 水谷昌義